北の森林に棲んで居る猛獣は此處まで送り來り、此激流を眺めて稍躊躇の色ありしが、忽ち鰐橋の架りたるに力を得、一匹も殘らず、南森林に打渡り、高姫一行を送りて、兎の都に向つて進み行くのであつた。

（大正一一、八、二三、舊七、一、松村眞澄錄）

第一三章　平等愛（九〇四）

高姫外七人は鰐の橋を渡り、南の森林に數多の兎に迎へられ、漸くにして、青垣山を繞らせる森林の都、月の大神の鎭祭しある靈塲に辿り着いた。鷹依姫は白髮の冠を頂き、凡ての猛獣を子の如くなつけ、普く獣の靈の濟度に全力を盡してゐた。

高姫は久し振りに鷹依姫に面會し、固く手を握り、物をも言はず、嬉しさと懷かしさに涙を兩頰より垂らしてゐる。ここに愈高姫一行八人と、鷹依姫の一行四人を加へ十二の身魂は、天地に向つて、七日七夜の間斷なき神言を奏上し、すべての猛獣を悉く言向け和し、肉体を離れたる後は必ず天國に到り、人身を以て再び此土に生れ來り、神業に參加すべき約束を與へ、所在猛獣をして歡喜の涙に醉はしめたのである

如何に猛惡なる獅子、虎、狼、熊、大蛇、豺、豹と雖も、口腹充つる時は決して他の獸類を犯す如き暴虐はなさないものである。只飢に迫り、其肉體の保存上、止むを得ずして他の動物の生命を奪食ふのみである。

然るに萬物の靈長たる人間は、倉稟滿ちても猶慾を逞しうし、他人を倒し、只單に自己の財囊を肥やし、我子孫の爲に美田を買ひ、決して他を憐み助くるの意思なき者大多數を占めてゐる。併し乍ら、神代は社會上の組織、最も簡單にして、物々交換の制度自然に行はれ、金錢と雖も珍らしき貝殼、或は椰子の實の種をいろ〳〵の器にし、之を現今の金に代用し、又は砂金などを拾ひて通貨の代用にしてゐたのである。さうして一定の價格も定まつてゐなかつた。其れ故神代の人は最も寡慾にして、如何に惡人と稱せらるゝ者と雖も、只々情慾の爲に爭ふ位のものであつた。時には大宜津姫神現はれて、衣食住の贅澤始まり、貧富の區別漸く現はれたりと雖も、現代の如き大懸隔は到底起らなかつた。

大山住、野槌の神などの土地山野を區劃して占領し、私有物視したる者も出で來りたれ共、これ又現代の如くせゝこましき者にあらず、實に安泰なものであつた。

高姫、鷹依姫、龍國別は、茲に猛獸に對し、神に許しを受けて、律法を定め、彼等をして固く守らしめた。其律法の大要は

一、熊は熊、虎は虎、狼は狼、獅子は獅子、蛇は蛇、兎は兎として或地點を限り、其處に部落を作り、互に他獸の住所を侵さざる事、

一、各獸族は一切の肉食を廢し、木の實又は草の葉、木の芽などを常食とし、而も身体少しも痩衰へず、性質温良になり、互に呑噬の爭ひをなさゞるものなる事、

一、時々各獸團体より代表者を兎の都に派遣し最善の生活上の評議をなす事、

一、鰐をして、モールバンド、エルバンドの襲來に備へ、且つアマゾン河の往來の用に仕ずる事、

一、鰐を獅子王の次の位と尊敬し、年々、各獸、月の大神の社前に集まりて、懇談會を開き、鰐を主賓となし、年中の勞苦を犒ふ事、

一、右の律法に違反した者は、獅子王の命に依り、其肉體は取り喰はれ、其子孫永遠に獸類の身体を受得して、地上に棲息するの神罰を與へらるゝ事

等の數ケ條の律法を定め、獅子王を始め、各獸の王をして、之を其種族一般に布告せしめた。

之れより其律法を遵守し、月の大神の宮に詣でて、赤誠を捧げたる者は、一定の肉體の期間を經て歸幽するや、直に其靈は天國に上り、再び人間として地上に生れ來ることゝなつた。

又此律法に違反したる各獸は、其子孫に至る迄、依然として祖先の形体を保ち、今に尙人跡稀なる深山幽谷森林などに、苦しき生活を續けてゐるのである。あゝ尊き哉月の大神の御仁慈よ。

國治立大神はあらゆる神人を始め、禽獸虫魚に至る迄、其靈に光りを與へ、何時迄も淺ましき獸の體を繼續せしむることなく、救ひの道を作り律法を守らしめて、其靈を向上せしめ玉うたのである。故に禽獸虫魚の歸幽せし其肉體は決して地上に遺棄することなく、直に屍化の方法に依つて、天に其儘上り得るは、人間を措いて他の動物に共通の特權である。猛獸は云ふも更なり、烏、鳶、雀、燕其外の空中をかける野

鳥は決して屍を地上に遺棄し、人の目に觸るゝやうな事のないのは、皆神の惠に依りて、或期間種々の修業を積み、天上に昇り、其靈を向上せしむるからである。只死して其体軀を殘す場合は、人に鐵砲にて打たれ、弓にて射殺され、或は小鳥の大鳥に攫み殺され、地上に落ちたる變死的動物のみである。其他自然の天壽を保ち歸幽せし禽獸虫魚は殘らず神の惠みによりて、屍化の方法に依り天上に昇り得る如きは、天地の神の無限の仁慈、偏頗なく禽獸虫魚に至る迄、依估贔負なく均霑し玉ふ證據である。只人間に比べて、禽獸虫魚としての卑しき肉體を保ち、此世にあるは、人間に進むの行程であることを思へば、吾人は如何なる小さき動物と雖も、粗末に取扱ふ事は出來ない事を悟らねばならぬ。其精神に目覺めねば、眞の神國魂となり、神心となることは到底出來ない。又人間としての資格もないのである。

斯く曰はゞ人或は云はん。魚を取る漁師なければ吾等尊き生命を保つ能はず、獸を捉うる獵夫なければ、日常生活の必要品に不便を感ず、無益の殺生はなさずと雖も有益の殺生は又己むを得ざるべし。斯かる道を眞に受けて遵守することせば、社會の不便實に甚しかるべしとの反對論をなす者がキッと現はれるでありませう。併し各自に其天職が備はり、猫は鼠を捕り、鼠は人類の害をなす恙を取り喰ひ、魚は蚊の玉子子子を食し、蛙は稻虫を取り、山獵師は獅子、熊を捕り、川漁師は川魚を捕り、海漁師は海魚を捕りて、其職業を守るは皆宿世の因緣にして、天より特に許されたるものである。故に山獵師の手にかゝる禽獸はすでに天則を破り、神の冥罰を受くべき時機の來れる者のみ、獵師の手に掛つて斃れる事になつてゐるのである。海の魚も川魚も皆其通りである。

然るに現代の如く、遊獵と稱し、職人が休暇を利用して、魚を釣り、官吏其他の役人が遊獵の鑑札を與へられて、山野に獵をなす如きは、實に天則違反の大罪と云ふべきものである。自分の心を一時慰むる爲に、貴重なる禽獸虫魚の生命を斷つは、鬼畜にも優る殘酷なる魔心と云はなければならぬ。人には各天より定まりたる職業がある。之を一意專心に努めて、士農工商共神業に參加するを以て、人生の本分とするものである。

ペストが流行すると云つては、毒藥を盛り鼠を全滅せんと謀る人間の考へも、理論のみは立派なれ共到底之を全滅すること出來ない。又鼠が人家になき時は、人間の寢息より發生する邪氣、天井に凝結して小さき恙といふ虫を發生せしめ、其虫の爲に貴重の生命を縮むる樣になつて了ふ。神は此害を除かしめ、人の爲に必要に應じて鼠を作り玉ふたのである。鼠は恙と云ふ虫を最も好む者である。故に其鳴聲は常に『チウ〳〵』と云ふ、チウの靈返しは『ッ』となる。併し乍ら鼠の繁殖甚しき時は、食すべき恙少き爲、止むを得ず米柩をかぢり、いろ〳〵と害をなすに至る。故に神は猫を作りて、鼠の蕃殖を調節し玉ふたのである。猫の好んで食するものは鼠である。鼠の靈返しは『ニ』となる。猫の鳴聲は『ニャン』と鳴く、『ャ』は退ふこと『ン』は畜生自然の持前として、言語の末に響く音聲である。故に『ニャン』と云ふ聲を聞く時は鼠の『ニ』は恐れて姿を隱すに至るは、言靈學上動かすべからざる眞理である。人試みに引く息を以て、鼠の荒れまはる時、『ニャン』と一二聲猫の眞似をなす時、荒れ狂ひたる鼠は一時に靜まり、遠く逃去るものである。『ニャ』の靈返しは『ナ』となる。故に猫の中に於て言靈の清き者は『ナン』と鳴くのである。

すべて禽獸虫魚は引く息を以て、音聲を發し、神國人は吹く息を以て、臍下丹田より嘲喨たる聲音を發し、又引く息、吹く息の中間的言語を發する人種もあることを忘れてはならぬ。

又鳥の中にも、吹く息、引く息の中間的の聲音を一二聲發するものが、たまにはあるものである。馬は陽性の動物なれば、「ハヒフヘホ」と聲音を發し、牛は陰性の動物なれば、「マミムメモ」の聲音を發す、其他一切の動物、各特有の音聲を有し、完全に其意思を表示することは發端に述べた通りである。

馬は陽性の獸類なれば、人其の背に跨り、「ハイ」と聲かくれば、忽ち無意識に前進す。「ハ」は開き進むの言靈であり、「イ」は左右の息である。卽ち左右の足を開きて進めと云ふ命令詞となる。牛は陰性の獸類なれば、人あり、後より「シイ」と言へば前進す。「シ」は水にして且つ俯き流れ動くの意である。「イ」は前に述べた通りである。馬は頭をあげて、陽の息を示して進み、牛は頭を下げて陰の水火を示して進む、陽性の馬は「ドー」と言へば止まり、陰性の牛は「オウ」と云へば止まる。

「ド」は陽的不動の意味であり、「オー」は陰的不動の言靈の意味である。

之を以て之を見れば、禽獸虫魚一切惟神的に言靈によりて、動止進退することは明白なる事實である。其他の禽獸皆然りである。

或古書にミカエル立ちて叫び玉へば、山川草木、天地一切之れに應ずとあるも、言靈の眞意活用を悟りたる眞人の末世に現はれて、天地を震撼し、風雨雷霆を叱咤し又は驅使し、山川草木を鎭定せしめ、安息を與ふる言靈の妙用を示されたものである。

あゝ偉大なる哉言靈の妙用！

× × × × × × × ×

是より高姫、鷹依姫、龍國別、外九人は月の大神の御前に恭しく拜禮を了り、兎の王をして厚く仕へしめ、アマゾン河の畔に出でて、モールバンドを始めエルバンドの一族に向ひ、善言美詞の言靈を與へて、彼等を悅服せしめ、遂にモールバンド、エルバンドは言靈の妙用に感じ、雲を起し、忽ち龍体となつて、天に昇り、風を起し、雨を呼び、地上の一切に雨露を與へ、清鮮の風を萬遍なく與へて、神人萬有を安住せしむる神の使となつたのである。

併し乍らまだ悔い改めざる彼等怪獸及猛獸の一部は、今尙淺ましき肉體を子孫に傳へて、或は深林に、或は幽谷にひそみ、海底、河底に潛伏などして、面白からぬ光陰を送つてゐる者もあるのである。

古の怪しき獸は、今日に比ぶれば、其數に於て其種類に於て最も夥しかつた。併し乍ら、三五教の神の仁慈と言靈の妙用によつて、迫々に淨化し、人体となつて生れ來ることゝなつた。故に靈の因緣性來等に於て、今日と雖も、高下勝劣の差別を來すことゝなつたのである。併し乍ら何れも其根本は天御中主大神、高皇產靈神、神皇靈產神の造化三神の陰陽の水火より發生したるものなれば、宇宙一切の森羅萬象は皆同根にして、何れも兄弟同樣である。

同じ人間の形体を備へ、同じ敎育をうけ、同じ國に住み、同じ食物を食し乍ら、正邪賢愚の區別のあるは、要するに靈の因緣性來の然らしむる所以である。

或理窟家の中にはすべての人間は同じ天帝の分靈なれば、靈の因緣性來系統、直系、傍系などの區別ある理由なしと論ずる人がある。斯の如き論說は、只一片の道理

に座して、幽玄微妙なる靈魂の經緯を知らざる人である。人の肉體に長短肥瘠、美醜ある如く、靈魂も亦之れに倣ふは自然の道理である。要するに人間の肉體は靈魂のサックの如うな物であるから、人間各自の形体は靈魂其者の形体であることを悟らねばならぬ。靈魂肉體を離れ、靈界に遊ぶ時は、其脱却したる肉體と同樣の形体を備へ居る事は、歐米靈學者の漸く認むる所である。

物質文明の學は泰西人に先鞭をつけられ、靈魂學の本場たる我國は、亦泰西人に靈魂學迄先鞭をつけられつゝあるは、天地轉倒、主客相反する慘狀と云はねばならぬ。我々は數十年來靈魂學の研究につき、舌をたゞらし、聲をからして叫んで來た。されど邦人は如何に深遠なる眞理と雖も、泰西人の口より筆より出でざれば、之を信ぜざるの惡癖がある。故に如何なる高論卓說と雖も、一旦泰西諸國に輸出し、再び、泰西人の手を借りて、輸入し來らざれば、信ずること能はざる盲目人種たることを、我々は大に歎く者である。此物語も亦一度泰西諸國の哲人の耳目に通じ、再び譯されて輸入し來る迄は、邦人の多數は、之を信じないだらうと豫想し、且つ深く歎く次第であります。惟神靈幸倍坐世。

（大正一一、八、二三、稿七、一、松村眞澄錄）

千早振神の建てたる神國も
人の行爲に汚れ行くかな

蛸間山煙り噴きつゝ常世往く
　暗を晴らして世人戒しむ
山は裂け海は淺せなん世ありとも
　變らざらまし神の仁慈は
大神の教に玉ひし言の葉の
　現はれ出でゝ世人かしこむ

第一四章　山上の祝（九〇五）

神代の昔高天にて
瑞の御靈の月神が
高砂島の秘密郷
アマゾン河の南北に
廣袤千里の中心に
月の御靈の天降り
兎の王に與へられ
月大神を朝夕に
五六七の神と現はれし
大海原に漂へる
ブラジル國に名も高き
聳り立ちたる大森林
珍の聖地を形造り
此れの聖地を悉く
千代の住家と定めつゝ
心の限り伏し拜み

齋祀れる折柄に
武備徹回の制定に
常世の國を後にして
此森林に襲ひ來て
虐げ殺して餌ばとなし
正しき兎は九分九厘
種族も絶ねんとする時に
現はれ來る三五の
龍國別の一行が
大激流の氾濫し

常世會議の其砌
翼はがれし猛獸は
ブラジル國に打渡り
心正しき兎の族を
日に〳〵募る暴虐に
彼等が毒牙にかかりつゝ
綾の聖地を後にして
神の司の鷹依姫や
目無し堅間の船に乘り
伊猛り狂ふアマゾン河を

溯りつゝ南岸に
兎の王に迎へられ
聖地にやう〳〵迎りつき
大蛇、禿鷲其外の
神の惠の言靈に
時雨の森は天國の
鷹依姫の後を追ひ
三五教の神司
神の伊吹に服從ろひて
アマゾン河に立出でゝ

迎りてここに一行は
月の御神を祀りたる
虎、狼や獅子に熊
禽獸虫魚に至る迄
言向け和し今は早
春を樂む眞最中
はる〳〵尋ね來りたる
高姫、常彦、春彦が
茲にいよ〳〵十二人
天津御神の玉ひてし

珍の言靈宜りつれば　モールバンドやエルバンド
其他の怪獣悉く　神の惠に悅服し
靈を清め天上に　雲を起して舞ひ上り
尊き神の御使と　なりて風雨の調節に
仕へ奉るぞ尊けれ　テーリスタンやカーリンス
龍國別を始めとし　心の空も安彦や
胸凪ぎ渡る宗彦が　清き心の秋山別の
神の司と諸共に　教を固くまモリスの
案内につれて屏風山　果てしも知らぬ山脈の
空に秀でていと高き　帽子ケ岳の靈光を
杖や力と頼みつゝ　神の惠に抱かれて
山河渡り谷を越ね　險しき坂をよぢ上り
ここに十二の生身魂　帽子ケ岳におさまりて
時雨の森の神軍に　光りを與へ助けたる
言依別の大教主　國依別の神司
二人が前に迎りつき　宏大無邊の神恩を
感謝し乍らウヅの國　都を指して進み行く
あゝ惟神々々　御靈幸はひましませよ。

十二人の一行はアマゾン河の魔神を言向け和し、各自に靈魂の行末を明かに諭し、且つ救ひの道を開き、琉と球との靈光に照らされ、意氣揚々として、宣傳歌を唄ひ乍

ら、山川溪谷を跋渉し、漸くにして、帽子ケ岳に止り、種々の神策を行ひ、神軍應援に從事しゐたる、敎主言依別命、國依別命の前に歸り來り、互に其無事を祝し、成功をほめ、感謝の涙を流しつゝ、互に打解け、喜び勇んで帽子ケ岳の頂上に、國魂神の神靈を祀り、感謝の祝詞を奏上し、凱旋の祝を兼ね、あたりの木の實を採收し來りて各其美味をほめ、ここに山上の大宴會は開かるる事となつた。

然るに時雨の森の北の森林に向ひたる、正純彦、カール、石熊、春公の一隊は何の消息もなく、一日待て共二日待て共、歸り來るべき樣子さへなかつたのである。

ここに言依別命が國魂神を厚く念じ、一同神樂を奏し、言靈歌を唄ひて、正純彦一行が無事ここに歸り來るべき事を十二の身魂を合せて、熱心に祈願をこめつゝあつた。

一行四人は大森林を右に左に駈け巡り、高姫一行の所在を搜し求むれ共、音に聞いし數百里の大森林、容易に發見すべくもあらず、殆ど絶望の淵に沈み、一行四人は双手を組んで、以前、春彦ヨブが暫し休息したる頭欠け石地藏の傍に、惟神的に引よせられ、石地藏より、高姫、鷹依姫以下十人、アマゾン河の魔神を言向け和し、今や帽子ケ岳に向つて凱旋の途中なることを、詳細に解き諭され、喜び勇んで、帽子ケ岳さして、三日遲れた夕暮れに漸く山上に辿りつき、言依別命以下の無事を祝しここに一行十八人となり、賑々しく、屏風ケ岳の山脈を降りて長き原野をわたり、ブラジル峠を乘越ひ、暑熱の太陽に全身をさらし乍ら、漸くにしてウヅの都の末子姫が館に凱旋する事となつた。

（大正一一、八、二三、舊七、一、松村眞澄錄）

曲津神犯せる罪に攻められて
　苦しみ悶へ又も迷ひ來
天地の神の經綸を知らずして
　聖塲破ぶる曲ぞ忌々しき
時を得ずば龍も水底いと深く
　潜みて天上の道開き待つ

瑞月

第三篇　瑞雲　霞　靉靆（一六二）

第一五章　萬歳樂（九〇六）

五六七の御世を松代姫　心も直ぐなる竹野姫
一度に開く梅が香姫の　貴の命の御父と
現はれまして高砂の　珍の都に神舘
開きて世人を導きし　桃上彦の神司
五月の姫と諸共に　榊の御言を蒙りて
黄泉の島に出陣し　親子夫婦が抜群の
功績を立てゝ其名をば　四方に輝き玉ひたる
正鹿山津見の神　教の司の國彦に

ウヅの館を任せつゝ　遠く海原打わたり
今は再度エルサレム　貴の聖地にまし〳〵て
三五教の御教を　完全に委曲に開きけり
心も清き國彦の　長子と生れし松若彦は
父の言葉を畏みて　珍の舘に謹みて
皇大神の正道を　四方に傳ふる折柄に
神素盞嗚大神の　珍の御子とあれませる
入人乙女の末子姫　捨子の姫を伴ひて
汐の入百路を打渡り　光り輝き降りまし
神の教は遠近に　榮ゐて四方の國人は

神の恵と末子姫が　尊き政治に悦服し
互に歡ぎ喜びつ　松の神世を立てゐたる
時しもあれや三五の　神の教の大教主
言依別の神司　錦の宮を立出でゝ
玉照彦や玉照姫の　貴の命の神勅を
守りてここに出でましぬ　末子の姫を始めとし
松若彦や其外の　神の司は喜びて
言依別の教主をば　神の如くに尊敬し
教の花は四方入方に　匂ひ榮ゆる折柄に
アマゾン河の森林に　曲を言向け和さんと

立向ひたる神司
鷹依姫や高姫が
正純彦の神司
四人の伴を引率し
漸く渡り屏風山
雲を壓して聳に立つ
國依別に面會し
珍の靈光發射して
猛獸大蛇は云ふも更
其外數多の曲神に
國依別を始めとし
言靈戰を助けんと
カール、石熊、春公の
夜を日についで山川を
大山脈の中央に
帽子ケ岳に立向ひ
琉と球との寶玉の
時雨の森に潜みたる
モールバンドやエルバンド
向つて戰ふ神軍を

帽子ケ岳より射照らして
雲の上迄立て玉ふ
高姫一行其外の
帽子ケ岳を指して
アマゾン河の水流が
景色を眺めて言靈の
言依別や國依別の
始めて外に十六の
末子の姫の守ります
ウヅの館に悠々と
言向け和し大勝利
其言靈の尊さに
數多の司は勇み立ち
ここに漸く寄り來り
帶の如くに流れたる
太祝詞をば奏上し
琉と球との神人を
神の司と諸共に
アルゼンチンの大都會
凱歌を奏して歸ります

其御姿の勇ましさ　　末子の姫を始めとし
松若彦や捨子姫　　其外數多の神司
珍の都の國人を　　數多伴ひ出で迎ひ
無事の凱旋祝しつゝ　　ウヅの舘に迎へ入る
アルゼンチンの開けてゆ　　かゝる例しもあら尊うと
此世を造り固めたる　　國治立大神や
豐國姫大御神　　金勝要大御神
日の出神や木の花の　　神の命も勇み立ち
五六七の御世は目のあたり　　開けましぬと喜びて
百の正しき神司　　此れの聖地に使はして
神の軍の凱旋を　　喜び祝ひ玉ひけり
歡呼の聲は天地に　　響き渡りて高砂の
島もゆるがん計りなり　　あゝ惟神々々
御靈幸はひまし〳〵て　　言依別や國依別の
高砂島の大活動　　神素盞嗚大神の
はる〴〵茲に現まして　　神世の仕組となし玉ふ
清き尊き物語　　完美に委曲に細やかに
言靈車遲濃なく　　ころばせ玉へ惟神
神の御前に瑞月が　　畏み〳〵願ぎまつる。
末子姫は言依別命一行の凱旋を祝し、金扇を擴げ、自ら歌ひ自ら舞ひ玉うた。

末子姫「世は久方のいや尊き
高砂島の民草を
珍の光りに照らさんと
國仗別と諸共に
旭もテルの港迄
ヒルヒテルヒの國境
瀕死に惱む國人を
靈肉共に救ひつゝ
あなた此方と廻りまし
虎狼や熊獅子の
綾の高天を立出でゝ
仁慈無限の大神の
言依別の神司
目無し堅間の船に乘り
海路を渡り來りまし
三食の山の谷間に
尊き神の御教に
國依別に立別れ
數多の國人救ひつゝ
伊猛り狂ふ荒野原

渉り玉ひてやうゝに
玉照彦や玉照姫の
開かせ玉ふ時もあれ
父大神の御言もて
宣らせ玉ひし太祝詞
神の命は舘をば
教司を始めとし
四人の伴を從ひて
展開したる大森林
モールバンドやエルバンド
ウヅの都に出でまして
神の教をまつぶさに
此世を洗ふ瑞御靈
捨子の姫の口を借り
畏みまつりて言依別の
立出で玉ひ正純彦の
カール、石熊、春公の
アマゾン河の南北に
伊猛り狂ふ猛獸や
言向け和し玉ひつゝ

兎の都に祀りたる
尊き御稜威を畏みて
琉と球との靈光を
百の靈を治めまし
歸り來ませる嬉しさよ
御靈幸はひまし〳〵て
治まる常磐の松代姫
梅が香姫の一時に
大加牟津實と現まして
立てさせ玉ひし其如く

瑞の御靈の月の神
帽子ケ岳の頂上より
照り合はしつゝ永久に
凱歌をあげて今ここに
あゝ　惟神　々々
珍の都は永久に
清くすぐなる竹野姫
御稜威も開きて桃の實の
黄泉軍に殊勳をば
末子の姫を始めこし

言依別や國依別の
天地と共に永久に
照らせ玉へよ天津神
國魂神の龍世姫
末子の姫が愼みて
神の敎はいつ迄も
香の木實の花の如
あゝ　惟神　々々
言靈清く願ぎまつる」

貴の命の御功績
月日の如く明かに
國津神たち八百萬
月照彦の御前に
請ひのみまつり三五の
すぼまず散らず時じくの
薫りしげらせ玉へかし
皇大神の御前に

と唱ひ終り、一同に會釋して、神素盞嗚大神の鎭まります奥殿さゝて進み入る。

（大正一一、八、二三、舊七、一、松村眞澄錄）

瑞　月

我身をば呪ひし曲も良心に
　攻め立てられて自白するかな
我蒔きし種を苅らんと朝夕に
　狂ひ廻りぬ醜の曲神
鎭魂や歸神の道は迷妄と
　言ひつゝ醜の神術用ゆ

第一六章　回顧の歌（九〇七）

珍の神舘の八尋殿に末子姫の發起として大歡迎會は開かれ、言依別命は立つて、簡單なる祝歌を歌ひ玉うた。

言依別命『此世を造り固めたる
　嚴の御靈とあれませる
國治立大神は
百八十國の神人を
おひずまからず永久に
五六七の御世に救はんと

天地の律法制定し
清き教を立て玉ひ
豐國姫大神は
瑞の御靈と現はれて
錦の機を織らせつゝ
天教地教の神の山
堅磐常磐に鎭まりて
貴の聖地と諸共に
教を開き玉ひける
時しもあれや天足彦

胞塲姫二人の靈より
生れ出でたる曲津神
八岐大蛇や醜狐
曲鬼共の現はれて
豐葦原の瑞穗國
隈なく荒び猛りつゝ
神の依さしの八王神
八頭神まで籠絡し
追々勢力扶植して
盧長彦を謀主とし

國治立大神が
此世を遂に退隱の
餘儀なき迄に至らしめ
世は苅菰の亂れ行く
あゝ惟神々々
神の主なる嚴御靈
國治立大神は
天敎山の火坑より
身を跳らして根の國に
一度は落ちさせ玉へ共

此世を思ふ眞心の
凝り固まりて身を下し
野立彦と現はれて
豐國姫の化身なる
野立姫と諸共に
天敎地敎の兩山に
現はれ玉ひて三五の
敎を開き玉ひけり
再び嚴の御靈をば
分けさせ玉ひて埴安彦の

嚴の御魂や姫命
時節をまちてエルサレム
黄金山下に現はれて
救ひの道を宣べ玉ふ
其御心を畏みて
國大立大神の
四魂の神とあれませる
御稜威も殊に大八洲
彦命や大足の
神の命の神司

神國別や言靈別の
瑞能御魂と現はれて
茲に再び三五の
清き教を四方の國
開き玉ひし尊さよ
國大立大神は
神素盞嗚大神と
現はれまして許々多久の
罪や汚れを一身に
負はせ玉ひて天地の

百神達の罪科を
我身一つに引受けて
八洲の國に蟠まる
八岐大蛇や醜神を
天津祓の大道に
言向和して助けんと
いそしみ玉ふぞ尊けれ。
ウブスナ山のイソ舘
茲に暫く現れまして
日の出別命をば

後に殘して皇神は
いろ〳〵雜多に身をやつし
島の八十島八十の國
大海原を打わたり
自凝島に出でまして
貴の靈場と聞こたる
綾の聖地に上りまし
四尾の山に潜みます
國治立の御化身
國武彦大神と

互に心を合せつゝ
經と緯との糸筋を
整へ玉ひて世を救ふ
錦の機を織り玉ふ
錦の宮の神司
玉照彦や玉照姫の
貴の命にかしづきて
八尋の殿に三五の
神の教を開きつゝ
教主の役を任げられて

教を開きゐたりしが
嚴の御靈や瑞御靈
經と緯との大神の
御言畏み聖地をば
後に眺めて和田の原
渡りてこゝに來て見れば
思ひがけなき瑞御靈
神素盞嗚の珍の子と
生れ玉ひし末子姫
桃上彦の鎭まりゝ

教の館に現はれて
神の教を楯となし
惠の露を民草の
頭に下し玉ひつゝ
五六七の御世の有樣を
今目のあたり開きます
斯かる尊き靈場に
參り來りし樂しさよ
時しもあれや素盞嗚の
神の尊ははるゝ

此れの館に出でまして
捨子の姫に神懸り
アマゾン河の曲神を
言向和し救へよと
宣らせ玉ひし言の葉を
謹み畏み屏風山
帽子ケ岳に立向ひ
國依別に巡り會ひ
琉と球との靈光に
數多の魔神を言向けて

目出たく凱歌を奏しつゝ
十八柱の神の子は
ウヅの館に安々と
歸りて見れば有難や
神素盞嗚大御神
はる〴〵茲に出でまして
憩はせ玉ふ嬉しさよ
あゝ惟神々々
御靈幸はひまし〳〵て
高砂島は云ふも更

豐葦原の瑞穗國
百八十島の果て迄も
惠の露に潤ひて
世は泰平の花開き
梅の香りの五六七の世
松の操のいつ迄も
色も變らず永久に
榮ましませ惟神
神の御前に願ぎまつる
朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも
假令大地は沈むとも
誠の力は世を救ふ
誠の神は今こゝに
現はれ玉ひし上からは
天地と共に永久に
神の言葉は失せざらん
嚴の御靈や瑞御靈
金勝要大御神
日の出神や木の花の

咲耶の姫の神力は
龍宮海の底深く
天教山の空高く
千代に八千代に搖ぎなく
輝き亘り天地の
光りとなりて輝かむ
あゝ惟神々々
神の尊き御惠みを
謹み感謝し奉り
神の司を始めとし

四方の民草悉く
神の恵を嬉しみて
常磐の松のいつ迄も
變らざらまし高砂の
島根に生うる青松の
梢に鶴のすごもりて
名さへ目出たき尉と姥
龜の齡のぞこ迄も
大海原の波清く
吹く風さへも朗かに

靜まりませとほぎまつる
あゝ惟神々々
御靈幸はひましませよ」

と歌ひ了り、末子姫の後を逐ひて神素盞嗚大神の休ませ玉ふ奥殿指して進み入る。

國依別は立上り、金扇を開いて祝歌を歌ひ、且つ舞ひ始めた。其歌、

國依別「錦の宮を立出でて
高砂島に出でませる
波間に浮ぶ琉球の
琉と球との玉を得て
伊猛り狂ふ荒波を
言依別の大教主
御伴に仕へまつりつゝ
寶の島に上陸し
棚無し舟に身を任せ
乘り切り〳〵高砂の

島の手前に來て見れば
舟を乘上げ波の上
山なす波に襲はれて
高島丸の船長に
テルの港に來て見れば
常彦、春彦伴ひて
言依別の神司
國魂神を祀りたる
集まり來る國人の
暫く茲に止りて

高姫一行暗礁に
渡りて進む時もあれ
命危く見にければ
命じて船に救はしめ
先頭一に高姫は
姿を早く隱しけり
我れを伴ひ三倉山
龍世の姫の神靈地
靈と肉とを救ひつゝ
誠の道を宣り傳へ

夫より進んでヒルの國
鎭まりゐます神館に
震ひ動きて山はさけ
住家は碎け諸人は
苦み悶ゆる憐れさよ
紅井姫の命をば
ヒルの舘に立向ひ
天變地妖を鎭定し
峠を越えて日暮シの
ウラルの道の神司

楓別の永久に
出で行く折しも天地は
川は溢れて人々の
水と炎に包まれて
楓別の妹なる
惱みの中より救ひ出し
稜威の言靈宣り上げて
舘を立ちてアラシカの
舘に數を開きたる
ブール其他の人々に

神の教を宣り傳へ　紅井姫やエリナ姫
二人の女神を預けおき　又もやこゝを立出でて
安彦、宗彦從ひつ　ブラジル峠に差かゝり
丸木の橋を危くも　生命カラ〳〵打わたり
シーズン河を乘越にて　帽子ケ岳に立向ひ
別れて程經し神司　言依別に巡り會ひ
手を握りたる樂しさよ　琉と球との靈光に
アマゾン河や森林の　數多の魔神を言靈の
御水火に助けしづめつゝ　凱歌を上げて十八の
神の柱は潔く　ウヅの舘に來て見れば
思ひ掛なき末子姫　捨子の姫と諸共に
貴の教をひらきまし　松の神世と榮ゆく
其目出たさは言の葉の　盡す限りにあらじかし
心靜かな國彦が　御子の松若彦の神
主の君に能く仕へ　治まる此れの神舘
來りて見れば瑞御靈　神素盞嗚大神は
はる〳〵こゝに出でまして　我等が言靈軍をば
遙に守り玉ひつゝ　光り輝き玉ふこそ
げに尊さの限なれ　あゝ惟神〳〵々
國依別の神司　嚴の御靈や瑞御靈

日の出神や木の花姫の　貴の命の御前に
國魂神を通しつゝ　嬉しみ尊みほぎまつる
畏み尊みほぎまつる」

と歌ひ終り、又もや欣然として、奥殿に進み入る。

（大正一一、八、二三、舊七、一、松村眞澄錄）

瑞月

大神の道にさやりし醜神も
半ば覺めけり神の光明に

第一七章　悔悟の歌（九〇八）

松若彦は銀扇を擴げて、自ら歌ひ自ら舞ひ、祝意を表した。其歌

松若彦『珍の都の神司
神の命の御まつりを
後を襲ひて神館
謹み守り來る折
天もりましたる末子姫
これの聖地に來りまし
開き玉ひて國人に
時めき玉ふ桃上彦の
麻柱まつりし我父の
心を清め身を淨め
天の八重雲かき分けて
捨子の姫と諸共に
神の教を遠近に
恵の露を限もなく

與へ玉ひし尊さよ
神の尊の珍の御子
仕へまつりて三五の
言依別の神司
高天の原より降りまし
茂り榮ねて木の花の
かゝる例しは古より
光りは清く日月と
再び降り來ります
清き御姿畏くも

松若彦は素盞嗚の
末子の姫に朝夕に
教に侍らふ折柄に
自轉倒島の中心地
神の教はます〳〵に
一度に匂ふ如くなり
夢にも聞かぬ瑞祥の
御稜威を爭ひ玉ひつゝ
神素盞嗚大神の
拜みまつりし嬉しさよ

松若彦は云ふも更
四方の國人喜びて
皷腹擊壤の神の世を
アマゾン河の曲神を
歸り來ませる言依別の
目出たく迎へ奉り
炙りし豆に紫の
千代の歡び永久の
高砂島の永久に
あゝ惟神々〳〵

百の司を始めとし
御德を慕ひまつりつゝ
壽ぎまつる折柄に
神の教に言向けて
瑞の命の一行を
枯木に花の咲く如く
花咲き出でし如くなる
春の樂み末永く
あらん限りは忘れまじ
神の御水火の幸はひて

末子の姫の守ります　　アルゼンチンの神國は
大三災の憂へなく　　小三災の曲もなく
いや永久に松の世の　　五六七の神の御恵みに
うるはせ玉へ　惟神　　神の御前に千歳經る
松若彦が謹みて　　心の丈を立直し
ひたすら念じ奉る　　只管祈り奉る
あゝ　惟神　々々　　御霊の幸を賜へかし」

と歌ひ終り、蒼皇として一同に拜禮し、又もや奥殿に姿を隠した。

鷹依姫は銀扇を開き、自ら歌ひ自ら舞ひ祝意を表した。其歌

『豊葦原の中津國　　メソポタミヤの天恩郷
バラモン教の本山に　　大國彦を奉齋し
バラモン教を開きたる　　鬼雲彦に從ひて
教を四方に傳へつゝ　　自轉倒島に渡り來て
高春山の岩窟に　　アルプス教を開きつゝ
テーリスタンやカーリンス　　百の司を呼び集へ
紫色の寶玉を　　齋きまつれる折柄に
三五教の神司　　高姫、黒姫兩人が
天の鳥船空高く　　蹶かせつゝ出で來り
玉ひし折を奇貨として　　手段をめぐらし岩屋戸の
中に押込めゐたる折　　玉治別や杢助が

國依別や龍國別を　先頭に立てゝ出で來り
年端も行かぬ愛娘　初稚姫の言靈に
嚴しく打たれてアルプスの　教を乘てゝ三五の
神の教に服從ろひつ　龍國別は我子ぞと
悟りし時の嬉しさよ　綾の聖地に送られて
錦の宮に朝夕に　謹み仕へ居たりしが
黄金の玉の保管をば　托されゐたる黒姫が
思はず玉を紛失し　ヤッサモッサの最中に
高姫司が現はれて　思ひもよらぬ御難題
黒姫さんを始めとし　鷹依姫や龍國別の
教司を伴ひて　尊き聖地を立はなれ
テーリスタンやカーリンス　五つの身魂は各自に
黄金の玉の所在をば　あく迄捜し求めんと
大海原を打わたり　龍宮島や常世國
高砂島の果て迄も　さまよひ巡りて尋ぬれど
尋ぬる由もなき寢入り　アリナの瀧に現はれて
四方の國より種々の　大小無數の品玉を
手段を以て呼び集め　時を待ちつゝありけるが
テーナの里より黄金の　珍の御玉の納まりて
ヤッと心を治めつゝ　黄金の玉を逸早く

錦の袋に納めつゝ
暗に紛れてアリナ山
荒野ケ原に來て見れば
神に出會いて村肝の
廣袤千里の大原野
駒を進むる膝栗毛
身を任せつゝ海原を
一度は海に陷落し
琴平別の化身なる
ゼムの港に上陸し
一行四人は烏羽玉の
漸くわたりてウヅの國
木の花姫の化身なる
心の駒を立直し
辿りてアルの港まで
折柄出で來る帆船に
渡る折しも過ちて
大道別の分靈
八尋の龜に救はれて
天祥山を乘越ねて

チンの港やアマゾンの
時雨の森の南側
珍の聖地に安着し
清き湖水をめぐらせる
數多の猛き獣を
言向け和し救ひつゝ
惠のつゆを限もなく
アマゾン河を打わたり
一行八人と諸共に
帽子ケ岳のあなたより
河瀬を舟にて上りつめ
兎の王の都なる
月の大神まつりたる
靈地に足を止めつゝ
神の御水火の言靈に
獣の司と成りをへて
うるほし與ふる折柄に
尋ね來ませる高姫が
不思議の再會祝ふ折
不思議の靈光發射して

靈を照らし玉ひけり
アマゾン河に立出でゝ
神の恵みに言向けて
十二柱の神の子は
帽子ケ岳によぢ登り
國依別と諸共に
天地の神に太祝詞
山野を渉り坂を攀ぢ
深き恵もアルゼンチンの
凱旋したる嬉しさよ

これより一同勇み立ち
醜の魔神を征服し
一行喜び勇みつつ
不思議の靈光尋ねつゝ
言依別の瑞御靈
無事の凱旋祝しつゝ
稱へ了りて一行は
清き流れの谷を越ゑ
ウヅの都に恙なく
ウヅの舘に來てみれば

神素盞嗚大神や
生れ出でませる末子姫
神の尊き御教を
鎭まりゐます尊さよ
拭ふが如く晴れわたり
輝き玉ひて三五の
皇大神の御前に
あゝ惟神々々
國治立大神や
仕組み玉ひし松の世の

八人乙女の珍の子と
松若彦と諸共に
世人に廣く傳へつゝ
心にかゝる村雲も
眞如の日月心天に
誠を悟り一同が
額づきまつる嬉しさよ
御靈幸はひまし〳〵て
豐國姫大神の
錦の機の神業に

仕へまつりて天地の　珍の御子と生れたる
清き努めを永久に　盡させ玉へ　惟神
神の御前に願ぎまつり　今日の喜び心安く
神の御前に祝ぎまつる　あゝ　惟神々々
御靈幸はひましませよ」

と謠ひ終りて、座に着き、一同に向つて、叮嚀に挨拶をするのであつた。

次に高姫は金扇を開いて、自ら歌ひ、自ら舞ふ。其歌

高姫「われは高姫神司　フサの國なる北山の
隱れし里に神館　造り設けてウラナイの
神の教を立て乍ら　瑞の御靈の大神の
御心疑ひ怪しみて　いろ〳〵雑多と氣をいらち
國治立大神の　經の教を主となし
緯の教をこと〴〵く　損ひ破り松の世の
五六七の御世を來さんと　思ひし事は水の泡
瑞の御靈の眞心を　取違ひたる愚さよ
前非を悔いて三五の　神の教に立歸り
變性男子の御教や　變性女子の教をば
經と緯とに織りなして　尊き神の神業に
仕へまつりし折柄に　金剛不壞の如意寶珠
紫色の寶玉を　失ひ心は轉倒し

あらゆる島根をまぎ求め　遂には龍宮の一つ島
地恩の郷迄あらはれて　心を碎き身をくだき
捜しまはれど影さへも　波の上渡り自轉倒の
又もや島に立歸り　執念深くもさま〴〵と
再び玉の行方をば　捜し求むる折柄に
龍宮島より現はれし　玉依姫の御實
天火水地と結びたる　青赤白黄紫の
麻邇の實珠の點檢に　又もや不審を起しつゝ
言依別の後を追ひ　高砂島に來て見れば
鏡の池の片畔　架橋御殿に黄金の

玉は更なり如意實珠　紫玉や麻邇の玉
隱しあらむと氣をひがみ　いろ〳〵雜多と爭ひつ
常彦、春彦伴ひて　テルヒウヅヒの國境
アリナの山を乘越にて　荒野ケ原に來て見れば
ボブラの上にブラ〳〵と　黄金の玉は輝きぬ
天の與へと雀躍し　喜び勇む折柄に
木の花姫の御化身　日の出姫の現はれて
天地の道理をこま〴〵と　敎へ玉ひし嬉しさよ
いよ〳〵迷ひの夢醒めて　執着心を脫却し
荒野を渡り川を越に　湖水をめぐりてやう〳〵に

アルの港に安着し　折柄來る帆船に
乘りて海をば渡る折　ふとした事より船中の
ヨブの眞人に巡り會ひ　師弟の約を結びつゝ
ゼムの港に上陸し　天祥山やチン港
アマゾン河を横ぎりて　時雨の森の北野原
鷹依姫の所在をば　尋ねてさまよひゐたりしが
さも恐ろしきモールバンド　勢猛く攻め來り
命からゞ〳〵常磐木の　梢に難をさけ乍ら
天津祝詞を奏上し　嚴の言靈宣る折に
秋山別を始めとし　モリス、安彦、宗彦が

三五敎の宣傳歌

此方に向つて進み來る　聲も涼しく謠ひつゝ
雲押分けて光り來る　時しもあれや西北の
モールバンドは驚きて　琉と球との靈光に
茲に一行八人は　スゴ〳〵逃げ出す嬉しさよ
アマゾン河の岸の邊に　無事の奇遇を祝しつゝ
鰐の架橋打わたり　森林分けて辿りつき
鷹依姫や龍槌別の　南の森に現ませる
ここに一行再會を　珍の住家に立向ひ
御前に祝詞を奏上し　祝し會ひつゝ大神の
虎狼や獅子に熊

其外數多の禽獸に　　稜威の律法制定し
固く守らせおき乍ら　　再び岸邊に立出でゝ
モールバンドやエルバンド　　さしもに猛き曲神を
言向け和し十二人　　琉と球との靈光を
目當てに進み歸り來る　　心の駒の勇ましさ
言依別や國依別の　　貴命に迎へられ
感謝祈願も胸の中　　嬉し涙に暮れ乍ら
一行ここに十八の　　神の司は勇み立ち
夜を日についでウヅの國　　此れの館に立向ひ
數多の人に迎へられ　　八尋の殿に來てみれば

五六七の御世の救主　　神素盞嗚大神や
珍の御子なる末子姫　　其他數多の神司
天つ御空の星の如　　居並び玉ふ尊さよ
あゝ惟神々々　　神の惠を蒙りて
心曇りし高姫も　　眞如の月日に照されて
身魂も清き益鏡　　伊照り輝く身となりぬ
朝日は照るとも曇るとも　　月は盈つとも虧くるとも
假令天地は覆るとも　　天津御空に日月の
輝く限り大神の　　深き惠みは忘れまじ
尊き神の御教を　　朝な夕なに麻柱ひて

今迄犯せし罪科を　悔い改めて　惟神
尊き神の御前に　功績を立てむ永久に
松の五六七の末迄も　あゝ惟神々々
御靈幸はひましませよ」

と謡ひ終り、莞爾として座に着いた。

（大正一一、八、二三、舊七、一、松村眞澄録）

瑞月

吾妻なる國のあはれを聞く度に
胸とゞろきて涙こぼるゝ

第一八章　龍國別（九〇九）

龍國別は銀扇を開き自ら歌ひ自ら舞ふ。其歌

龍國別「我れは龍國別神
　ウラナイ教の高姫が
教を尊み畏みて　心の駒を立直し
高城山の麓なる　松姫館の門番と
仕へまつりて朝夕に　鐵門を守る折柄に
三五教の教の御子　馬と鹿との兩人が
尋ね來れる折柄に　門番共は猛り立ち
いろ〳〵雜多の亂暴を　加へて懲せと兩人は

忍耐強く何事も
其眞心に感動し
忽ち龍の眞似をなし
神罰忽ちめぐり來て
體と忽ち變じけり
凡ての人は言靈や
清き人格保てよと
迷ひの雲も晴れ渡り
神の使の神人に
說き示されて三五の
神の心に任せゐる
傲慢無禮を耻ぢ乍ら
奥殿深く這ひ込めば
我々一同は畜生の
神の御國に生れたる
身の行ひを愼みて
示させ玉ふ御教に
松姫、お節の目の前で
天地自然の眞理をば
神の教に入信し

龍若司と呼ばれたる
龍國別と名を賜ひ
玉治別や國依別の
高春山に捉はれし
救ひ出さんと立向ひ
アルプス敎の神司
紫色の寶玉や
此方に受取り鷹依姫の
思ひ掛なき垂乳根の
驚き喜び神恩を
昔の名をば改めて
茲に尊き宣傳使
敎の司と諸共に
高姫、黑姫兩人を
杢助、お初の應援に
鷹依姫を言向けて
高姫、黑姫兩人を
神の司をよく見れば
生みの母ぞと判明し
感謝し乍ら親と子が

三五敎の人々と
高天原の靈場に
建ち並びたる神床に
朝な夕なに親と子が
仕へまつれる折柄に
黄金の玉はいつの間か
黑姫さんに疑はれ
親子は悲しきさすらひの
所在を搜し高姫の
棚無し舟に身を任せ

手を携へて綾錦
大宮柱 太知りて
赤き心を捧げつゝ
心の限り身の限り
黑姫さんの保管せし
行方も知らず消ゑ失せぬ
高姫さんに追ひ出され
旅に上りて寶玉の
疑念をはらし清めんと
當途も波の上を漕ぎ

廣袤千里の海原を
高砂島のテルの國
茲に四人の一行は
玉の所在を搜せ共
假令百年探るとも
親子は首を傾けつ
見込はアリナの瀧の上
鏡の池に現はれて
岩屋の側に草庵を
鷹依姫の我母を

難行苦行の末遂に
テーリスタンやカーリンス
恙もあらず上陸し
果てしも知らぬ大國を
いかでか搜し得べけんや
千思萬慮の其結果
親子の心を照らすなる
猿世の彦の舊蹟地
結びて神を祀りつゝ
岩窟深く忍ばせて

權謀術數の惡業と
一つの策をねり出して
母は月照彦となり
二人を言觸れ神となし
月照彦 大神に
すべての願を叶へんと
其効空しからずして
種々の玉をば携へて
心の底は何となく
黄金の玉の行方をば
心を惱ませ痛めつゝ
われは審神者の役となり
テーリスタンやカーリンス
高砂島の全体を
玉を献ぜし者あらば
宜らせ玉ふと觸れまはし
遠き近きの國々の
詣で來れる可笑しさよ
ウラ耻かしく思へ共
探らん爲の此手段

我眞心を天地の
あゝ 惟神々々
能きに見直し聞直し
早く取寄せ玉へよと
テーナの里の酋長が
玉に喉をば鳴らしつゝ
一行四人打わたり
借る折もあれ木の花の
戒められて改心し
アマゾン河を溯り
神も照覽ましまさん
廣き心に宜り直し
黄金の玉を一日も
祈る折しもヒルの國
献りたる黄金の
夜陰に紛れてアリナ山
荒野ケ原に露の宿
神の命の御化身に
原野を渉り海を越ゐ
時雨の森の南森

兎の一族住まひたる
立現はれて諸々の
誡を諭し言靈の
帽子ケ岳のあたりより
吾等一同勇み立ち
感謝祈願の折もあれ
數多の司を從ひて
鰐の族に助けられ
進み來るぞ嬉しけれ
大森林の禽獸に
青垣山の聖場に
鳥獸に三五の
威力を示す折柄に
輝き來る靈光に
月大神の御前に
三五教の高姫が
波立ち狂ふ激流を
嚴言靈を宣り乍ら
こゝに我等は雀躍し
神の教を蒙りて
一定不變の律法を
河邊に潜む怪獸を
惠の光りを與へつゝ
琉と球との靈光を
雲間に近き大高山
言依別や國依別の
嬉し涙に暮れ乍ら
前途の光明樂みて
身魂は山野を打わたり
ウヅの館に來て見れば

制定し乍らアマゾンの
言向和し、天國の
茲に一行十二人
目當となして西北の
帽子ケ岳に駈け上り
神の命に面會し
互に無事を祝しつゝ
茲に一行十八の
日數を重ねて漸くに
ひに有難き末子姫

捨子の姫と諸共に
こゝに降臨ましく〳〵て
國彦司の珍の御子
いそしみ玉ふ功績は
怪しき雲の影もなく
高砂島の名に耻ぢず
榮ゑゐませる其中に
はる〳〵茲に下りまし
輝きわたり玉ひけり
吾等一行助けよと

遠き波路を打わたり
治め玉へる尊さよ
松若彦が忠實に
月日の如く輝きて
國人歡ぎ睦びつゝ
珍の都の名も清く
言依別の大敎主
神德ます〳〵赫灼に
アマゾン河に迷ひたる
神素盞嗚 大神の

清き尊き神懸り
自ら言依別 神
吾等一行は云ふも更
潜む曲津に無限なる
其神德はいや高く
光り輝き玉ひけり
救ひの神と現れませる
高砂島に蟠まる
安きに救ひ助けんと
思へば〳〵罪深き

其御敎を畏みて
帽子ケ岳に登りまし
アマゾン河や森林に
仁慈の惠を垂れ玉ひ
帽子ケ岳の頂上に
頃しもあれや現し世の
神素盞嗚 大神は
醜の靈を言向けて
天降りましたる尊さよ
吾等親子がはしなくも

尊き神にめぐり會ひ　御影を拜する嬉しさは
假令天地は變る共　千代に八千代に忘れまじ
あゝ惟神々々　御靈幸はひまし〳〵て
今日の親子が喜びを　幾千代迄も變りなく
恵ませ玉へ惟神　神の御前に願ぎまつる
神の御前に願ぎまつる」

と歌ひ終り、自席に着いた。

（大正一一、八、二四、舊七、二、松村眞澄錄）

第一九章　輕石車（九一〇）

今迄バラモン教の教主となり、高照山の山麓に宏大なる館を造り、其勢力を四方に振充したる石熊は、乾の瀧に御禊をなす折柄、大蛇に魅入られ、身体強直し、今や危機一髪の際、末子姫の一行に言靈を以て救はれ、茲にいよ〳〵三五の教に歸順し、テルヤ山峠を乘越ゑ、巽の池の魔神を言向け和さんとして大失敗を演じ、腰を抜かし、一時は兩脚の自由を失ひ、困窮の折柄、カールの奇智に依りて助けられ、カールの後を追つかけ、末子姫の御跡を慕ひて茲に參る詣うで、バラモン教の信徒を悉く三五教に導き、高照山の靈場をウヅの館の末子姫が出張所となし、捨子姫、カールの兩人をして、此神館を守らしめ居たりしが、此度言依別命、ウヅの館へ降り來れるを機會

に、石熊はカールを招き、春公を伴ひ、言依別の教主に從ひ、アマゾン河に立向ひ、漸くにして一行十八人と共に、ウヅの都に凱旋し、見れば思ひもかけぬ、神素盞嗚大神の御降臨と聞き、歡喜の念に堪へず、茲に祝歌を謠つて、舞踏し始めた。其歌

石熊　『常世の國の自在天　大國彦や大國別の
神の命の立て玉ふ　バラモン教の御教を
此上なき救ひの道となし　心の限り身の限り
神の御前に仕へつゝ　沐雨櫛風の勞を積み
教を四方に開きつゝ　三五教を目の上の
敵と思ひあやまりて　教の御子をウヅの國
此れの館に忍ばせて　いろ〳〵雜多と畫策を
めぐらし來りし愚かさよ　テル山峠の中腹に
高くかかれる大瀑布　乾の池より降り來る
水に身魂を清めつゝ　天眼通の神力を
授け玉へと祈る折　吾身体は强直し
身動きならぬ不思議さに　仰いで瀑布を眺むれば
も恐ろしき大蛇奴が　眼を怒らしつ口開き
呑み喰はんと構へ居る　其恐ろしさ身も震ひ
胸も轟き惱む折　忽ち聞ゆる三五の
誠の道の宣傳歌　近付き來る嬉しさに
以前の心を取直し　私かに感謝の折もあれ

三千世界の救世主
八人乙女の末子姫
吾側近く仕へたる
悠々進み來りまし
安々救はせ玉ひつゝ
恵も深き露の玉
獰猛なりし曲神は
執着心を解脱なし
雲を起して天上に
あゝ惟神々々

神素盞嗚大神の
捨子の姫を伴ひて
カールの司を先頭に
九死一生の危難をば
大蛇に向つて言靈の
注がせ玉へば流石にも
涙を流し喜びて
恵の網に曳かれつゝ
喜び勇み昇りゆく
神の恵の尊さよ

末子の姫に從ひて
登りつ下りつ楠の
末子の姫の一行と
世人を惱め喰ふなる
心も勇み進み行く
宜る言靈は忽ちに
風吹き荒び波猛り
何と詮方なき儘に
神の司の御前に
末子の姫は忽ちに

テル山峠の峻坂を
木蔭に一夜の雨宿り
巽の池に立向ひ
大蛇を言向け和さんと
神德足らぬ石熊が
大蛇の怒を激發し
雨は車軸と降り來り
兜を脱いで三五の
心の罪を謝しければ
嚴の言靈宜り上げて

雲霧四方に吹拂ひ
稜威の神力目のあたり
忽ち大蛇は解脱して
姿を茲に現はしつ
雲を起して昇り行く
神業終へて池の邊を
いかにやしけん石熊は
行歩も自由にならざれば
救ひを求め鎭魂の
カールは如何思ひけん

波をば靜め雨をとめ
示させ玉ふ尊さよ
巽の池の波を割り
感謝し乍ら空高く
末子の姫の一行は
後に眺めて去り玉ふ
兩脚自由を失ひて
カールの司を呼とめ
其神業を賴め共
口を極めて嘲弄し

尻をからげて逃げ出す
カールの司思ひ知れ
雄健ぶ機みに兩足は
カールの後を追ひ乍ら
末子の姫や捨子姫
こめさせ玉ひし御待遇
殊恩を感謝し忽ちに
三五教に導きて
朝な夕なに神前に
げに有難き三五の

其無念さに腹を立て
仇敵を討たねばおかないと
思ふが儘に活動し
ウヅの館に來て見れば
松若彦の眞心を
嬉し涙に暮れ果てゝ
バラモン教の信徒を
歸順の誠を表しつゝ
仕へまつりし折柄に
言依別の神司

茲に現はれ玉ひつゝ
あゝ惟神々々
辱なしと眞心を
神素盞嗚大神は
アマゾン河の森林に
鷹依姫の應援に
其神勅を畏みて
正純彦を始めとし
伴ひ館を立出でゝ
帽子ケ岳に立向ひ

尊き教を宣り玉ふ
神の惠の有難や
捧ぐる折しも瑞御靈
捨子の姫の口を假り
立向ひたる高姫や
早く向へと宣り玉ふ
言依別の大教主
カール、石熊、春公を
千里の原野を打渡り
國依別の神司に

對面されて琉、球の
河の魔神や森林の
言向け和はし靈光に
鷹依姫や高姫の
帽子ケ岳に相會し
身も勇ましくウヅ館
あゝ惟神々々
朝な夕なに戀ひしたふ
神素盞嗚大神は
自ら茲に降りまし

玉の光りにアマゾンの
猛き獸の荒びをば
照させ玉ふ有難さ
神の司と諸共に
教主の君に從ひて
凱旋したる目出度さよ
神の惠みの淺からず
瑞の御靈の救世主
イソの館を立出でゝ
汚れ果てたる吾々が

身魂を洞め與へんと　御幸ありしぞ有難き
あゝ惟神々々　神の惠を蒙りて
心きたなき石熊の　重き罪をば赦せかし
千代に八千代に神恩の　尊き限りを忘れずに
孫子に傳へていや固く　仕へまつらむ惟神
瑞の御靈の大御神　國魂神の御前に
神壽ぎ言を宣りあげて　畏み〳〵願ぎ申す
あゝ惟神々々　御靈幸はひましませよ」

と自分の戯悔や經歴を語り、且つ瑞の御靈の大神の降臨ありし事を感謝し、自席に復した。

カールは又もや立上つて兩手を拍ち、腰を振り、面白く踊り乍ら、謠ひ始めた。

カール「罪もカールの神司　口もカールの神司
手足もカールの神司　カール〳〵皆さんが
尊き歌を誦み乍ら　踊つて舞うて來歴を
數千万言並べ立て　最後に至つて救世主
神素盞嗚大神の　珍の舘に天降り
まし〳〵たりと聞くよりも　手の舞足のふみ所
知らぬ許りの嬉しさを　得意の言靈運轉し
高尚優雅に述べ上ぐる　あゝ惟神々々
カールも一つ驥尾に附し　何か謠はにやなるまいと

此場にスックと立上り　得意の手踊りお目にかけ
言霊車押しませう　バラモン教の神司
頭の固き石熊が　高照山の山麓に
教の館を構へつゝ　猜疑の心深くして
三五教を邪魔助と　朝な夕なに思ひつめ
ウヅの館にまわし者　信者に化かして入りこませ
あらゆる手段をめぐらして　漁夫の巨利をば占んとす
其憎さげな行動を　轉覆さしてくれんずと
松若彦の前に出で　心の丈を打あけて
願へば松若彦の神　暫し首を傾けて

吐息をもらし宜らすやう　あゝ是非もない〳〵
カールの勝手にするがよい　石熊館に忍び込み
偵察するのはよけれ共　厲になつて呉れるなよ
お前の心はブカ〳〵と　信仰きまらぬ浮草よ
昨日はこちらの岸に咲き　今日は向方の岸に咲く
安心ならぬと宜へば　カールは左右に首をふり
私も男で御座ります　石熊如何に辯舌を
揮つて籠絡しようとも　どうして〳〵動きませう
必ず心配遊ばすな　細工は流々仕上りを
見てゐて下されませいやと　バラモン教に化け込んで

石熊さんにお氣に入り
信任されたる苦しさよ
神尊の珍の御子
遠き波路を打わたり
天眼力かは知らね共
吾々五人をテル山の
二人の女を待伏せて
高照山に歸れよと
心そぐはぬ五人連れ
息を休らふ折柄に
お側の重き役となり
頃しもあれや素盞嗚の
末子の姫や捨子姫
珍の館に出ますと
石熊さんが前知して
峠を越ねてハラ港
物をも言はせずふん縛り
さもいかめしき御命令
黄昏過ぐる芝の上
片方の木蔭に怪しくも
細く聞ゆる怪聲に
バラ〳〵と逃げて行く
木蔭に佇み伺へば
捨子の姫と知つた故
仕へまつりて登る折
末子の姫の命令に
豈計らんや石熊の
化石の如く固まりて
苦み居たる氣の毒さ
大蛇の靈を解脱させ
伴れの奴等は肝つぶし
カールは後に只一人
これこそ確に末子姫
テル山峠の案内に
水音高き瀧の聲
乾の瀧に往て見れば
神の司は瀧の下
兩眼計りキョロつかせ
末子の姫の言靈に
石熊さんを從ひて

テル山峠の急坂を
降り〳〵て樟の森
明かして巽の池の邊に
一行七人立向ひ
大蛇の神は怒り立ち
末子の姫は嚴かに
大蛇を言向け和しつゝ
石熊さんは腰扳かし
こうしたものか俺の足
助けて呉れよと泣き出す

節面白く謠ひつゝ
短き夏の一夜さを
迎への人と諸共に
石熊さんの言靈に
形勢不穩となりければ
珍の言靈宜り玉ひ
天に救はせ玉ひける
アイタ、タヲタアイタ、、
一寸も言ふ事きゝよらね
妙な事をば云ふ人ぢや

耳なら如何に遠くても
耳の代りをするものか
言靈車を押しつれど
身動きならぬ氣の毒さ
愛想づかしの數々を
目を釣り上げて立腹し
今にぞ思ひ知らせんと
大地をドン〳〵轟かせて
足もカールの石熊は
心の底より了解し

聞くであらうが足が又
早く立て〳〵早立てと
壁になつた石熊は
直してやらねばなるまいと
並べ立つれば石熊は
おのれカール奴馬鹿にすな
足の痛みを打忘れ
カールの跡について來る
始めてカールの眞心を
嬉し涙を流しつゝ

御禮を云うて下さつた
御禮は云うて下さるな
尊き神の御恵みと
足が立つたに違ない
三五教の神様に
奏上なさるがよからうと
石熊さんは手を拍つて
誠に感服しましたと
今も吾目にちらついて
カール、石熊兩人は

コレ〳〵モウし石熊さん
私が直すぢやない程に
お前の心が引立つて
私にお禮を言ふよりは
感謝祈願の太祝詞
一寸教へてやつたれば
カールさんお前の云ふ通り
ニッと笑うた其顏は
どしても斯しても忘られぬ
いよ〳〵心を合せつゝ

末子の姫や松若彦の
誠を勵む折柄に
突然茲に天降りまし
朝な夕なに宜り玉ひ
ように心も勇み立ち
心にかゝる雲もない
いそしみ仕ふる時もあれ
珍の教に言依別の
伴ひ玉ひて屏風山
時雨の森やアマゾンの

教の司に能く仕へ
言依別の大教主
尊き神の御教を
天の岩戸の開けたる
これでいよ〳〵夜があけた
し〳〵と喜んで
神素盞嗚大神の
瑞の命は吾々を
帽子ケ嶽に立向ひ
河に潜める曲神を

言向け和し悠々と　再び館に凱旋し
喜び勇む時もあれ　肉体持つた正眞の
神素盞嗚の神様が　茲に現はれましますと
聞いたる時の嬉しさよ　あゝ　惟神　々々
賤しき吾等も天地の　惠の露にうるほひて
瑞の御霊の救世主　神素盞嗚　大神に
間近く仕へまつるとは　天地開けし始めより
これに優りし喜悦なし　あゝ　惟神　々々
嬉しき夢は何時迄も　醒めずにあれや珍館
一度に開く木の花の　匂ひめでたくいつ迄も
散らすにあれや　惟神　神の御前にほぎまつり
國魂神の御前に　謹み　敬ひ願ぎまつる
謹み　敬ひ願ぎまつる」

と謡ひ終り、さも嚴粛なる宴席をドット許り笑はせた。

（大正一一、八、二四、舊七、二、松村眞澄録）

第二〇章　瑞の言　昭（九二）

神素盞嗚大神は奥殿より、末子姫、言依別、國依別其他の主なる神司を從へ、宴席に現はれ玉ひ、一同に向ひ、さも愉快氣に目禮を與へ、座の中央に立たせ玉ひて、喜びの歌を謠ひ給ふた。其大御歌

神素盞嗚命『久方の天津御空の空高く
雲押分けて降ります
神伊邪諾大御神
神伊邪册大御神
筑紫の日向の立花の
小戸の青木が原と聞ゐたる
天教山の中腹に
撞の御柱いや太く
御立て玉ひしあが御祖
國治立大神は
天地百の神人の
百の罪科負ひ玉ひ
烈火の中に身を投じ
根底の國に至りまし
豐國姫大神は

阿波の鳴門に身を投じ
又もや根の國底の國
完美に委曲に取調べ
こゝに二柱の大神は
再び地上に現はれて
野立彦や野立姫
神命と世を忍び
天地百の神人を
安きに救ひ助けんと
心惱ませ玉ひつゝ

黄金山やヒマラヤの
峰に現はれまし〳〵て
三五教を樹て玉ひ
再び五六七の神の世を
開き玉ひて萬有を
一切殘らず救はんと
經と緯との機を織り
深遠微妙の神業を
開かせ玉ふぞ尊けれ
豐國姫の分靈

神素盞嗚のあが魂は
神伊邪諾大神の
教の御子と生れ來て
大海原に漂へる
島の八十島八十の國
完美に委曲に治らす折
八岐大蛇の醜身魂
勢猛き醜狐
曲鬼などの此處彼處
現はれ來りて八洲國

世は苅蕪と紊れ果て
山河草木は枯れほして
常世の暗となりにける
神伊邪諾大神は
此慘狀を見そなはし
日の稚宮を出で立ちて
天敷山に降りまし
我れに向つて宣はく
汝の治らす國ならず
月の御國に到れよと

涙片手に宜り玉ふ
千萬無量の御心を
拜しまつりて久方の
高天原に參上り
姉大神の御前に
到りて心の清き事
詳さに現はし奉らんと
御側に參りさむらへば
姉大神は怪しみて
入洲の河原を中に置き

誓約をせよと宜り玉ふ
我れは畏み忽ちに
姉のまかせる美須滿琉の
五つの玉を請ひ受けて
天の眞名井にふり滌ぎ
姉大神は我が佩ける
十握の劍を手に受けて
天の眞名井にふり滌ぎ
高皇產靈大神の
御前に畏み侍らひて

善惡邪正の魂分けを
祈り給へば姉神は
嚴の御靈とあれましぬ
清明無垢のあが魂は
瑞の御靈と現はれぬ
嚴と瑞との靈しらべ
善惡邪正は明かに
鏡の如くなりにけり
さはさり乍ら八十猛
神の命は怒らして

あが大神は祓なり
瑞の御靈の救世主
いづくに曲のあるべきか
答へあれよと詰めよつて
畔放ち溝埋め頻蒔し
其外百の荒び事
伊猛り狂ふ恐ろしさ
姉大神は畏みて
天の岩戸に隱れまし
豐葦原の瑞穗國

再び常夜の暗となり
黑白も分かぬ悲しさに
百の神達相謀り
八洲の河原に集まりて
五伴男の神司
鈿女の神の演技に
目出たく岩戸は開きける
神素盞嗚の我が魂は
天地百の神人の
千座の罪を負ひ乍ら

高天原を退はれて
豐葦原の瑞穗國
當途も知らぬ長の旅
此世を忍ぶ身となりぬ
さは去り乍ら伊邪諾の
皇大神の御心
秘かに我れに傳へまし
八岐の大蛇を言向けて
天地を塞ぐ村雲の
大蛇の劍を奪ひ取り

姉大神に獻れ
豐葦原の神國は
頓て汝の治らす國
心を煩ふ事勿れ
斯く宣り終へて久方の
御空に高く去りましぬ
瑞の御靈と現はれて
百八十國を駈めぐり
アサの國なるウブスナの
大山脈の最高地

我隱れ家と定めつゝ
新木の宮を建て並べ
日の出別に守らせて
八人乙女を中津國
メソポタミヤの天恩の
郷に遣はしバラモンの
教の司を三五の
誠の道に言向けて
心を平に安らかに
世界の神人睦び合ひ

松の神世の瑞祥を
千代に八千代に立てんとて
心を配る我が身魂
八人乙女の末の子と
生れ出でたる末子姫
仕組の糸に操られ
高砂島に渡り來て
アルゼンチンの珍館
現幽二界の救主ぞと
敬はれつゝ神の道

開きゐますと聞きしより
イソの館を立出でゝ
鳥の岩樟船に乘り
やう〳〵茲に來て見れば
言依別の神司
國依別や高姫や
鷹依姫や龍國別の
神の司の相並び
アマゾン河に潛みたる
八岐大蛇の殘黨や

猛き獣を悉く
あが三五の大道に
言向和はし歸り來る
其勇ましき有樣を
見るより心も勇み立ち
汝等正しき神の子に
神祝ぎ言葉を述べんとて
此場に現はれ來りしぞ
あゝ惟神々々
神の大道をよく守り

五六七の御世の神政に
清く仕へて天地の
神の柱となれよかし
神は汝と共にあり
人は神の子神の宮
小さき慾に踏み迷ひ
寶の宮を汚すなよ
心の空は冴わたり
眞如の日月皎々と
いや永久に照りわたり

下界の暗を照臨し
神の御子たる天職を
堅磐常磐に立てよかし
あゝ惟神々々
神に誓ひて宣り傳ふ
神に誓ひて宣り諭す
朝日は照るとも曇るとも
月は盈つとも虧くるとも
如何なる惱みに會うとても
神より受けし眞心を

汚し損ふ事勿れ
これ素盞嗚が汝等に
眞心こめて宣り傳ふ
誠の道の言靈ぞ
世界を救ふ神言ぞ
あゝ惟神々々
御靈幸はひましませよ」

と歌ひ終り給ひて、正座に着かせ給うた。

（大正一一、八、二四、舊七、二、松村眞澄錄）

第二一章　奉答歌（九一二）

末子姫を始め、一同の神司は大神の此宣示に感謝の涙堪へ難く、只俯むいて神恩の廣大無邊なるに驚喜する許りであつた。

捨子姫は一同を代表し、大神に對し、答禮歌を謹嚴なる口調にて歌ひ上げ奉る事となつた。其歌、

捨子姫『神伊邪諾大神の
一度に開く梅の花
其味はひも素盞嗚の
救ひの神と現まして
御鼻に生れます貴の御子
結ぶみのりも豊やかに
澄み切り玉ふ神身魂
天地百の罪科を
御身一つに負はせつゝ
入岐大蛇や醜狐
誠の道の言霊に
尊き御身を厭はずに
虎伏す野邊を乗越えて
巡り玉ひて人草の
神を言向和しつゝ
雲霧分けてテルの國
アルゼンチンの神舘
末子の姫の現れまして
入洲の國に蟠まる
探女醜女や曲鬼を
言向和し救はんと
雪つむ山を打渡り
大海原をはるゞと
火拂ひ病氣の
天の鳥船空高く
テル山峠を下に見て
入人乙女の珍の御子
霊と肉との教もて

世人を救ひ玉ひつゝ
厭ひ玉はず天降りまし
教の御子は云ふも更
恵の露を與へんと
末子の姫や捨子姫
國依別や高姫や
教司は神恩の
感謝の詞さへ口籠る
厭はせ玉はず何時迄も
高砂島の國人に
月日を送る神館
三五教の神司
青人草の末までも
出でさせ玉ひし尊さよ
言依別の神司
鷹依姫や龍國別の
いやちこなるに感歎し
實にも嬉しき此聖場
身魂を寛ろぎ玉ひつゝ
瑞の御靈のうるほひを

恵ませ玉へ　惟神
捨子の姫が畏みて
朝日は照るとも曇るとも
假令大地は沈むとも
此世を守り恵みます
大御心を愼みて
教を四方に擴充し
酬み奉らむ我々が
珍の都に末永く
あゝ　惟神　々々
神の司を代表し
御前に願ひ奉る
月は盈つとも虧くるとも
誠一つを立て通し
神素盞嗚大神の
夢寢にも忘れず三五の
大神恵の萬一に
清き心を諸なひて
御跡を垂れさせ玉へかし
御靈幸はひましませよ」

と簡單に挨拶を述べ終つた。

神素盞嗚大神は滿足げに、含笑み玉ひ乍ら、末子姫、言依別命を從へ、再び奥殿深く進み入り玉ふのであつた。

安彦、宗彦、秋山別、モリス、正純彦、常彦、春彦、ヨブ、テーリスタン、カーリンス、春公などの祝歌あれ共、餘りくだ〳〵しければ、省略する事となしぬ。

一同は神殿に詣で天津祝詞を聲も涼しく奏上し終つて、天の數歌を歌ひ上げ、神言を奏上し、神恩を今更の如く、深く厚く感謝し、各與へられたる席に着き、暖かなる一夜の夢を結ぶ事となつた。

茲に神素盞嗚大神は奥殿に於て、言依別命、松若彦の司と謀り、末子の姫の一身上に關する大問題につき、協議を凝らされつゝあつた。果して如何なる協議が纒まつたであらうか。あゝ、惟神霊幸倍坐世。

今日は大正十一年八月廿四日、舊七月二日、昨夜來の豪雨に、狩野川は濁水氾濫し水聲轟々として、川の邊の館に於ける口述は聲低き物語聞取り難きを慮り、新築されし臨時教主殿の奥の間に於て、筆者松村氏と共に第三十二卷の霊界物語を編む事となつた。湯本館の二階には綾の聖地より、福島、星田兩女史出張し、何事か筆を走らせ例の筆先を認めて居られる。忽ち飛電あり、二代教主瑞月に急々相談あり、昨夜八時の急行にて來ると、瑞月は雨の館に身を横たへ乍ら人待顔に述べ立つる。惟神霊幸倍坐世。

（大正一一、八、二四、舊七、二、松村眞澄錄）

瑞月

精ちゃんは色が白い
そして中肉中背で
聲がよい何を歌つても
よくこなす私は精ちゃんが
大好きだ朝から晩まで
優しい顔見て暮してる
一日會はいでも淋しふなる
決して戀ではなけれども

第四篇　天祥地瑞

（一六三）

永久のまことの神の美に放れ
夢な辿りそ滅亡の美を
村肝の心の塵を今までの
醜の惡習の水に洗ふな

瑞月

第二二章　橋

架（九一三）

國依別、高姫、鷹依姫、龍國別其他の宣傳使は各休息室を與へられ、夜は其處に眠り、筋骨を休ませて居た。翌朝早々國依別の一室に松若彦は尋ねて來た。

松若『國依別様、御早う御座います。就いてはあなたに折入つての御相談が御座いまして、早くから御邪魔を致しました』

國依『これは又改まつた御言葉、私に對し、御相談とはどんな事で御座いますか。明心ありげに、笑を含んでゐる。國依別は智の言依別様が居らせられる以上は、どうぞ命様に御相談下さつたら、如何でせうかなア』

松若『實の所は夜前神素盞嗚大神様の御召しに依り、言依別様及び私と三人三つ巴になつて、御相談あつた結果、私が特命全權公使に選まれて參りましたので御座います。萬一此使が不成功に終るような事あれば、此松若彦は海外旅行券を交附された手前腹を切らねばならないのです』

國依『そりやマア大變な御使命と見ますが、どうぞ早く仰有つて下さいませ。私の力の及ぶ事ならば、神様に捧げた此體、如何なる御用も承はるで御座いませう』

松若『實の所は私の父國彦は、正鹿山津見神様が、五月姫様と共に黄泉比良坂の戰ひに御出陣の砌、ウヅの國の人民は申すも更なり、此神館を御預け遊ばし、やがて時來らば、神素盞嗚大神様の瑞の御靈の珍の御子、此國に降り玉ふことあるべし、それ迄汝は吾命を守つて、此國及び神館を預り呉れよとの嚴命で御座いました。父は幸

か不幸か、最早幽界に參りましたが、後に殘つた私が父の跡を繼ぎ、此館を守つて居ります所へ、正鹿山津見の神樣の御仰せの如く、瑞の御靈の大神樣の御娘子、末子姫樣が御越し遊ばしましたので、直ちに御館を姫樣に御渡し申し、此國をも御渡しをして、私は御存じの通り、總司として仕へて參りました。然るに此度、御父君神素盞嗚尊、突然天降り給ひ、大變に御悅び遊ばし、且つ末子姫も最早、良い年頃であるから適當な夫を持たせたいのだが……との御尋ね、招かれた我々始め言依別命樣は、言下に國依別樣を御婿樣になされましたら如何でせうと申上げし處、大神樣は大變に御悅び遊ばされ、實は其事に就て、はる〴〵ここ迄、出て來たのだ、どうぞ神德の强き國依別を末子姫の夫になつて吳れる樣、其方は取り持てよ……との御命令、取る物も取り敢ず、あなたに於ても御異存は御座いますまいと思ひまして……へ、、、、一寸全權公使の役を拜命し、御伺ひに參つた次第で御座います。どうぞ善は急げですから、早く善き御返事を御願ひ申します」

國依別は案に相違の面持にて、首を傾け、双手を組み、太き息をつき乍ら、物をも言はず、兩眼より涙さへ滴るのであつた。

松若「モシ國依別さん、あなたは、何夫れ程御思案なされますか？見れば涙を御垂らしになつてゐるやうですなア。如何しても御氣に入らないのですか？」

國依「イエ〳〵どうして〳〵氣に入らぬ所か、餘りの事で、勿体なくて、申上げる言葉も御座いませぬ。私は若い時より道樂の有丈を盡し、澤山の女殺し、後家倒し家つぶしをやつて來た罪の塊で御座います。今日は三五教の宣傳使として、女と一切の關係を絶ち、生涯獨身生活を續ける覺悟を致して居るので御座います。如何に大

神様の思召しなればとて、私の様な横着者の成れの果て、何程魂が研けたと申しましても、白い布に墨が浸んだのと同様に、いくら洗つても元の白い生地にはなりませぬ。つまり靈魂上の疵者で御座います。斯様な疵物が水晶身魂の生の處女なる末子姫様の夫になるなぞと云ふ事は、どうしても良心が咎めてなりませぬ。冥伽の程が恐ろしうなつて参りました。どうぞ右様の次第で御座いますから、惡からず、大神様に私の素性を素破ぬいた上、宜しく御斷り下さいませ」

松若「左様な御遠慮はチッとも要りませぬ。神素盞嗚大神様は、あなたがバラモン教の信者であつた事も、女泣かしの後家倒し、家潰しをなさつた事も、大の惡戯者で居らつしやつた事も、松鷹彦様の御宿を知らず〳〵に訪ね、お勝殿といろ〳〵のローマンスのあつた事、夫れから眞浦様の弟なる事、一切萬事御取調の上の事で御座いますから、決してそんな御遠慮は要りませぬ。言依別様も口を極めて、あなたの美點を上げ、又惡い癖を一つも殘らず、大神様に申上げられました。所が大神様は大變な御機嫌で……あゝ其奴は益々面白い男だ、氣に入つた。どうぞ早く末子姫の夫にしたいものだ……との思召しで御座いましたよ……國依別さん、あなたは言依別様から承はれば、隨分からかひの上手な御方ぢやそうですから、私がこんな事いつて、あなたをからかつてゐると思はれるか知りませぬが、今日は眞劍ですから、どうぞ眞面目に聞いて下さい」

國依「から買ひも豆腐買も、厄介も喧嘩買も、法螺貝もドブ貝も、心靈研究會も、大日本修齋會も、議會も日本海も皆目ありませぬワイ、正眞正銘の僞りなきあなたの御言葉、國依別實に光榮に存じます。併し乍ら貴族と卑族との結婚は提灯に釣鐘、釣

合はぬは不縁の元ですから、要らぬ苦勞をさせずに、どうぞ体よく斷つて下さい」

松若「エ、國依別さん、眞劍ですよ。又例の癖を出して、正直な私をじらしなさるのですか。あなたの本守護神はキッと契約濟の實印を押捺して御座るに間違ありませぬよ。又世の諺にも、戀に上下の隔てなしと云ふぢやありませぬか。隔のないのが所謂戀の神聖なる所以です」

國依「私は一旦婦人との關係を心の底より斷念して居ますから、戀なんか心に起した事はありませぬ。鯉が瀧上りをし、夕立に乘つて天上する樣な險呑な結婚問題は、どうぞ御賴みですから、早く徹廢して下さい」

松若「又しても、鮒々と埒のあかぬ、あなたの御言葉、末子姫樣が、あの飯蛸、尻目でお前さんの後姿を睨んで、あの男を鮨なとして、私のオットセイに持ちたいものだと、明けてもくれても、つばすを呑み込んで、あかえ年だから、鯉の炎をもやして御座るのだから、どうぞ色よいあぢのよい返辭をして下さい、あなたも鰭々鯖けた人間だと云つて、鰭はまりしてゐられるのだ。それにお前さんが、尾をふり、鰭をピンとはねるやうな事をなさつたら、……あゝ私も折角の鯉が叶はねば、一層の事、ちぬ鯛、小鮒な浮世に生鰕したかて、サヨリがないからと云つて淵川へ身を投げて了はれたら、お前さん何程魚々とうろついて悔んでもあとの祭り、大神樣からは、是程事を分けて、言ふのに鯉の樣にはねつけるとは、ギギシイラぬ奴だと御立腹遊ばすかも知れませぬ。私にこれ程白魚もやさして、お前さんはそれでも、氣が濟むのかい。マア厭でも添うて見なさい。仕舞にやすすきになりますぞや。ヤメで暮すより鮎らしい奥さんとガザミに手を引いて、山野を時々跋渉なさるのも乙

ですよ。これ程私に八釜しう鰯ておいて、だまつてゐることは、餘りぢやありませぬか。今日は大神樣の思し召だから、瓢簞鯰では通りませぬぞや」

國依『エエハモ鰈ヤガラ腥い厄介坊主の自墮落上人で御座いますから、どうぞ今日限り、そんな事を言つて下さるな。女のスキ身も差身もモウ若い時から食ひあいて來ました。夜も書もレコ貝に蛤だつたものだから、どうぞ、カマスにおいて下さい。此事に付いは、イカナゴとも飯蛸致す譯には參りませぬ。アハヽヽ』

松若彥、國依別の脊中を後へまはつて、ポンと叩き

松若『コレ國依別さん！　又しても、あなたは、からかひ病が起りましたね』

國依『カラカギでも鯰でも、フンゾクラヒでもありませぬよ。小雲川で石の魚を釣つてフンゾクラヒだと云つて、高姫さんに贈つた事があります。隨分固い魚でした。其通り私は今は鯉の慾が化石して了ひ、石地藏の樣な冷酷な人間ですから、到底此緣談は温まりますまい。鯉と云ふ奴は水の中に常住してゐますから、隨分體が冷てゐますからね。アハヽヽ』

松若『コレ國依別さん、大國主の神さんの妻呼びの歌を知つてますだらう。男子たる者はそうなくては到底世に立つことは出來ますまい。情を知らずして、どうして宣傳使が完全に勤まりますか。八千矛の神さんを御覽なさい。はる〴〵と出雲の國から越の國まで、腰辨當でお出でになつたぢやありませぬか。其時のお歌に

八千矛の　神の命は　八洲國　妻求ぎかねて
遠々し　越の國に　賢し女を　ありと聞かして
麗し女を　ありと聞こして　さよばひに　ありたゝし

結婚にあり通はせ　太刀が緒も　未だ解かずて
襲ひをも　未だ解かねば　乙女の　鳴すや板戸を
押そぶらひ　吾が立たせれば　引こずらひ　吾が立たせれば
青山に　鵺は鳴きぞ　野鳥　雉子は響む
庭つ鳥　鶏は鳴く　慨たくも　鳴くなる鳥か
此の鳥も　打ち惱め苦せね　いしたぶや　天はせづかひ
事の語言も　こをば

と歌はしやつて、越の國の沼河姫様の板の戸を、夜の夜中に押あけ這入らうと遊ばす、沼河姫さんは這入られては大變と、男と女が押そぶらひ、引こづらひを永らく遊ばした末、遂に大國主命さんの熱心なる戀に感じ、沼河姫さんは戸の中から

八千矛の　神の命　軟な草の　女にしあれば
吾が心　浦渚の鳥ぞ　今こそは　千鳥にあらめ
のちわ　和鳥にあらむを　いのちは　な死せ玉ひそ
いしたふや　天はせづかい

ここの語り言も　こをば
青山に　日が隱らば　烏羽玉の　夜は出でなむ
旭の　笑み榮ゑ來て　栲綱の　白き腕沫
沫雪の　わかやる胸を　そ叩き叩き拱がり
眞玉手　玉手さしまき　股長に　寢はなさんを
あやに　勿戀聞こし　八千矛の　神の命

ことの語り言も　こをば

と歌つて沼河姫がとう〳〵降參つて了ひ、實に神聖なローマンスが、行はれたちやありませぬか。それに何ぞや、お前さんは、八千矛の神一名大國主の神さまとは反對で、沼河姫樣よりズッと綺麗な賢女麗女にラバーされて、それを何とも思はず、すゆなくもエッバッバを喰はす考へですか。本當に人の惡い唐變木だなア……

……オットドッコイ、餘り一心になつて、ッイ言靈が濁りました。どうぞ早く

垣の　ふはやが下に　虫衾　柔やが下に
栲衾　亮ぐが下に　沫雪の　弱かやる胸を
栲綱の　白き腕　そ叩き　叩き拱がり
眞玉手　玉手差纏き　股長に　寢をし宿せ

豐御酒　献らせ

と云ふやうに御返事をして下さい。外の方の御使と違ひ、大神樣のお思召だから、これ許りは邪が非でも聞いて貰はなくちや、松若彦の男が立ちませぬ」

國依「大神樣を始め、末子姫樣に於て、御異存なければ御世話になりませう。其代りに古疵だらけの國依別ですから、何時持病が再發して、御姫樣に眉毛を逆立てさしたり、牙をむかせたり、死ぬの、走るの、ひまをくれのと亂痴氣騒ぎをさすかも知れませぬから、それが御承知なら、宜しく御取持願ひます」

松若「アハ、、、、面白い〳〵、私もそれがズンと氣に入つた……國依別さま、いよ〳〵御結婚が整へば、あなたはウヅの國の司、私は御家來で御座いますから、どうぞ末永く、お召使ひ下さいませ。今迄の御無禮な申し樣、只今限り御忘れの程を願

ひます」

國依「サア忽ちそうなるから、窮屈でたまらぬ。それだから獨身生活がしたいのだよ。あんたはん、ぶつたはん、大將さん、と皆の連中にヒヨコ／＼頭を下げられ、敬遠主義を取られるやうになつて了つちや、根つから世の中が無味乾燥で、面白くも何ともなくなつて了ふ。あゝ折角自由の世界へ解放されたと思つたら、又もや窮屈なお慈悲の獄屋に繋がれねばならぬのかいなア。エ、こんな事なら紅井姫でも伴らつて來て、自分の女房のやうに見せて居つたら、こんな問題は起らなかつただらうに、エ、有難迷惑とは此事だ。女が男にお膳を末子姫と來てゐるのだから、そう無下に無愛想に捨子姫する譯にも行こまい」

松若「なるべく、お氣樂な樣に持ちかけますから、どうぞ取越苦勞をなさらずに、決心をして下さいませ」

國依「ハイ、是非に及びませぬ。大神の御言葉、あなたの御取持、謹んで御受け致します」

ヒキツバリ答へた。松若彦はニコ〳〵し乍ら、輕く一禮し、急ぎ奥殿指して進み入るのであつた。

（大正一一、八、二四、舊七、二、松村眞澄錄）

第二三章　老婆心切（九一四）

國依別、末子姫の結婚の噂は、忽ち館の内外に雷の如く駄賃取らずの飛脚の口から喧傳されて了つた。之を聞いた高姫はムックと立上り、言依別命の居間を訪ねた。言依別命は結婚の準備に付いて、いろ〳〵と獨り心を働かせて居た所である。高姫は襖をソッと引あけ、叮嚀に頭を下げ、

高姫「言依別様、御邪魔を致しますが、一寸貴方に御相談申したきこと、否御尋ね申したき事が御座いまして伺ひました。お差支へは御座いますまいかなァ」

言依別「ハイ、別に大した用も御座いませぬ。どうぞ御這入り下さいませ」

と氣乘りのせぬ樣な言葉附きである。高姫はッカ〳〵と言依別の前に進み、行儀よく膝を折つてすわり、兩手を膝の上に乘せ、極めて謹嚴な態度で、

高姫「言依別樣、承はりますれば、末子姫樣に對し國依別の官傳使が養子婿になられるにきまつたとか云ふ、專らの噂ですが、それは實際の御話で御座いますか？」

言依別「ハイ、實際で御座います。私と松若彦兩人の肝煎で漸く婚約が成立致しました」

高姫「それは又怪しからん事ぢや御座いませぬか。三千世界の救ひ主、水晶魂の神素盞嗚大神樣の御娘子、生粹の大和魂の末子姫樣に妻はすに、人もあらうに、國依別の樣な惡戯者を御周旋なさるとは、餘りぢや御座いませぬか。能う考へて御覽なさい、女だましの後家倒し、家潰しの天則違反者、瓢輕者の、揶揄上手の、至極粗末に出來上つた男……丸で鷺と烏の夫婦ぢやありませぬか。其樣な汚れた身魂を水晶

の生の末子姫様に御世話をするなんて、折角の結構な身魂を又変して了うちやありませぬか。そうすれば、折角ウヅの國が五六七の世になりかけてゐるのに、再び泥海となり、上げも下ろしもならぬ如うなことが出來致します。私は此縁談許りは、假令大神様が何と仰られう共、神界の爲、御道の爲、御家の爲に、どこ迄も反對せなくては置きませぬぞね。まだ幸ひ結婚の式も擧げてゐらつしやらないのだから、今の内ならば如何でもなります、縁談と云ふものは、飯たく間にも冷ると云ふ事だ此話を取消した所で、今ならば何のイサクサも起りますまい。國依別が若しもゴテ〳〵云ふならば、及ばず乍ら高姫が物の道理を說き諭し、納得させて見せませう。又末子姫様が如何してもお聞きにならなければ、高姫の老婆心と言はれるか知りませぬが、此道にかけたら千軍萬馬の功を經た高姫、三寸の舌鋒を以て、どちらも得心の行く様になだめすかし、此結婚問題をジヤミにして見せませう。……言依別さん此事はどうぞ私に一任して下さいませ。キツと成功させて見せますから……」

言依別『一旦男子と男子が契約した以上は、今となつて動かすことは出來ませぬ。私も男です、一旦言ひ出した事は後へは引きませぬ。第一大神様の御所望ですから』

高姫『假令大神様の御所望であらう共、なぜお前さんは御忠言申上げないのだ。お髭の塵を拂つて、自分の地位を安全に守らうと云ふ御考へだらう。良藥は口に苦し、諫言は耳に逆ふとやら、至誠を以て諫め奉り、もし聞かれなければ、潔く死を以て決すると云ふ。お前さんに誠意がありさへすれば、こんな不都合な話は持上がらない筈だ。あんな者を末子姫様の夫にせうものなら、それこそ三五教の權威は忽ち地に落ち、末子姫様の御信用はサツパリ、ゼロとなつて了ひますよ』

言依別『あんな者が斯んな者になつたと云ふ仕組でせうかい、アハ、、、』

高姫『コレ笑ひごつちやありませぬぜ。千騎一騎の國家興亡に關する此場合、氣樂相に面をあげてアハ、、とはソリヤ何と云ふ心得違ひな事ですか。それだから年の若い者は困ると云ふのだ。何程憎まれても、此高姫が構はねば三五教はサツパリ駄目だ。アーア、氣のもめることだ。肩も腕もメキ〳〵云ふて來たわいのう』

言依別『折角の御親切な御注意、實に有難う御座います。併し乍ら此問題に付いては、一分たりとて動かすことは出來ませぬ。……高姫樣、どうぞ貴女もゆつくり御考へ下さいませ。私は少し取急ぐ用事が御座いますから、失禮を致します』

高姫『チと煙たうなつて來ましたかなア。ドレ〳〵若い方のお側へ、齒拔婆アが出て來て熱を吹き、煙たがられて居るよりも、これから國依別の居間へ行つて、一つドンナ意見だか叩いて來ませう。將を射んと欲する者は先づ其馬を射よだ。何と云つても言依別さんは、年が若いから、こんな事の談判は厭だらう。それも無理もない、憎まれ序に高姫が、お道の爲に、國依別の改心する所まで、居すわり談判をやつて來ませう』

と呟き乍ら、イソ〳〵と此場を立つて出でゝ行く。

國依別は高姫の意見に來ることは夢にも知らず

國依別『あゝ是から俺も窮屈な生活に入らねばならぬ。今の内に氣樂のしたんのうをしておかうかい』

と呟き乍ら、窓の戸をガラリとあけ、赤裸になつて、仰向けになり、手足をピン〳〵させて、座敷運動に餘念なかつた。そこへ高姫はあわたゞしくガラリと戸を開け入り

來り、此態を見て目を丸くし、口を尖らせ、

高姫『マア〳〵國さんかいな。其態は一体何の事だい！　誰も知らぬかと思つて、其態は何ぢやないな。ヤツパリ人の居る所では鹿爪らしうしてゐても、鍍金が剝げて三つ兒の癖は百までとやら、お前は若い時から、そんな不規律な生活をして來たのだらう。エ、困つたものだ。時々刻々に愛想がつきて來た。……コレ國依別さん、高姫ですよ、起きて貰ひませう』

國依別『高姫さん、一寸こゝを寫眞にうつして、大神樣や末子姫樣の御前に御覽に入れて下さいな。國依別も實にトチ面棒をふつてゐますワイ』

高姫『エ、又しても、四ツ足の正体をあらはし、其態は何の事だ。大神樣や末子姫樣に寫眞にとつて見せてくれなんて、ヘン、自惚にも程がある。誰だつてそんなとこを見やうものなら、三年の戀が一度に醒めますぞや。或處に若い娘が綺麗な若い男を戀慕ひ、よい仲になつて居つたが、其男が女の前で尻をまくり、屁を一つブンとこいたが最後、其女はそれきり、戀しい男が見るも厭になつて了うた例しがありますぞね。それにそんな態を末子姫樣に御覽に入れてくれとは餘りぢやないか。色男氣取りで結構な結婚を申込まれ、餘り嬉しいので逆上して了ひ、赤裸になつて、一角よい姿と思ひ……此姿を戀女に見せ……とはよい加減に呆けておきなさい。エ、見つともない、早く着物を着なさらんか！』

國依別『何分お門が廣いもんだから、こんな風でもして擊退策でも講じなけりや、やり切れませぬワイ。ア、あちらからも此方からも。目ひき袖ひき連中が澤山で、國依別も實に迷惑致して居るぞよ、男は裸百貫と申して飾りのないのが値打であるぞよ

元の生れ赤兒になりて神の御用を致して下されよ。生れ赤兒と申せば、みんな丸裸許りであるぞよ。アッハヽヽヽ」

高姫「コレ國さん、お前は一國の大將にでもならうと云ふ千騎一騎の大峠に差掛つて居り乍ら、チッと謹んだら如何だいなア。油斷を致すと、坂に車を押すが如く後へ戻りますぞ!」

國依別「あとへ戻る樣に逆になつて、油斷でなうて、冗談をして逆樣車を押してゐるのだ、アッハヽヽヽ。アーア、早う此處を誰か、一寸覗いて愛想をつかして呉れないかな。高姫さんに愛想つかされても、根つから目的が達しませぬワイ」

高姫「コレ國さん」

と聲を高め、國依別の太腿を三つ四つ平手でビシャ〳〵と擲りつけた。國依別は此機みに、ガバとはねおき、慌だしく窓際にかけておいた單衣をひつ被り、三尺帶を無雜作にキリ〳〵とまきつけ、ドスンと高姫の前にすわり込んだ。

國依別「高姫樣、何の御用で御座いますかな。どうぞ實際の事を仰有つて下さい」

高姫「お樂みでせうた!此頃は半日の日も百日も經つやうな氣がするでせう。イヤもう御心配御察し申しますワイ。併し乍ら、月にも盈つる虧くるがあり、村雲のかくすこともあり、綺麗な花には虫がつき、嵐が夜の間に吹いて來て、無殘にも散らすことがありますぞや。モウ大丈夫此方の者だと、笑壺に入つて居ると、夜の間に天候忽ち激變し、女の方から秋の空、凩の冷たい風が吹いてこぬとも限りませぬぞやそうなつてから、梟烏が夜食に外れたやうな、約らん顏を致しても、何程アフンと致しても、後の祭りで、取返しは出來ませぬぞや。夫れよりも男らしく今の内に、

花の散らされぬ内に、お前さんの方から、キレイサッパリと縁談を御斷りなさい。國依別さんのやうな、……言うとすまぬが……ガンガラと水晶の生粹のお姫樣と夫婦になつても、末子姫が遂げられますまい。惡い事は云ひませぬぞね。今の内に男らしう破談をなさい。そうしたら天晴れ國依別の男前が上りますぞや。此廣いウヅの國の第一美人で、而も評判のよい御姫樣を、國依別が一つポンと肱鐵をかましたと云ふことが世間に擴がつて見なさい。それこそどれ丈お前さんの威德が上るか知れたもんぢやない。そうして牛は牛づれ馬は馬連れと云つて、似合うた女房を貰ひ誰憚らず天下を横行濶歩する方が、窮屈な籠の鳥の樣な目に會ひ、一人の姫樣に忠勤振りを發揮するよりも何程德か分りませぬぞね。お前さんが姫樣の夫になり、天下の權利を握るやうな事があつたら、それこそ天地が引つくりかへりますぞや、いかな高姫も神樣の御用はやめねばなりませぬワイ。こうズケ〳〵と私が云うので、お前さんは御氣に入らぬだらうが、チッとは私の言ふ事も、聞きなさつたがよからう。隨分お前さんもいたづらぢやないか。野天狗か何か知らぬが、如意寶珠の玉や其外二つの玉は、近江の國の竹生島に隱してあるなどと、大それた嘘を言つて、はる〴〵と年の老つた吾々をチョロまかすと云ふ腕前だから、私の言葉がチッと位きつくても、辛抱しなさい』

國依別『アッハ、、、、面白い〳〵、私も實は今度の結婚は厭でたまらないのだけれど、餘り大神樣や言依別樣、其外の方々の御熱心な御取なしで斷る譯にも行かず、義理にせめられ承諾したのだから、そうけなり相に法界悋氣をして下さるな。國依別も實に迷惑致しますワイ』

高姫「オッホ、、、厭で叶はぬなどと、よう言へたものだ。此縁談をジヤミにされるのが、イヤで〳〵叶はんのだらう。そんなテレ隠しを云つたつて、日の出神の生宮……オツトドツコイ、是は云ふのぢやなかつた……高姫の黒い目でチヤンと睨んだら間違いつこはありませぬぞや」

國依別「アーア、困つた事が出來て來たワイ。どうしたら能からうな」

高姫「何程困つても仕方がない。此縁談許りは、言依別が何と言はうと、假令天地がかへらうと、金輪際水をさして、グチヤ〳〵にして了はなくちや、折角大神様が艱難苦勞なされてお造り遊ばしたウヅの國が總崩れになつて了ひますワイ。お前一人さへ改心が出來たら、國中の者が喜ぶのだから、女の一人位は男らしう思ひ切つて、數多の人民を助けた方が、何程立派か知れませぬぜ。又何程愉快か分りますまい」

……」

國依別「アーア、最早幽界も神界もいやになつて了つた。現界の惡い……高姫さん、私の腹の底が如何しても、神界（眞解）出來ませぬのかい」

高姫「それは何をユーカイ……皆目お前さんの腹の底を了解することが出來ぬぢやないかい」

國依別「アーア、仕方がない……私は一寸急用がありますので、そこ迄往つて來ます。どうぞ又四五日したら、ゆつくりと遊びにお出で下さりませ」

高姫「最早明日に迫つた此結婚、四五日してから來て下さい……なんて、ヘン、甘いことを仰有りますワイ。どうでも斯うでも、今夜の中にお前の所存をきめさせて、其上末子姫さんに御意見をして來ねばならぬのだから、そう逃腰にならずに、ジツク

リと聞きなさい」

國依別『聞きなさいつても、危機一髪でも聞きませぬワイ……御免候へ、高姫さん、私は結婚の用意が急ぎますから、髪を梳いたり、髯をそつたり、チックを一寸つけたり、頬紅もさしたり、口紅もチッとあしらはねばならず、鏡も一寸見て來ねばなりませぬ。そんな色の黒い顔のお婆アさんに相手になつてをると、ます〳〵末子姫さんが戀しうなつて來る。左樣なら……』

とあわてゝ飛び出さうとする。高姫は後よりグッと抱きとめ

高姫『コレ〳〵國さん、何處へ行くのだい。マア待ちなされ、ジックリとすわつて、天地の道理を聞いて下さい。決して惡いことは申しませぬぞや』

國依別『どうぞ離して下さい。そんな固い手で握られると痛くて仕方がない。一時も早う末子姫さんのお側へ行かねばならぬワイなア。岩に抱かれるか、眞綿に抱かれるかと云ふ程懸隔があるのだから堪らない。……高姫さん、どうぞ後生だから放して頂戴な』

高姫『エ、是が放してなるものか』

國依別『高姫さん、今これが放してなるものかと、云ひましたな。そんならヤッパリ二人の仲を離さんといふ御意見ですか？』

高姫『そりや話が違ふ。離れさすと云ふ話だ。今がお前の運のきめ所、サアさつぱりこゝでツンと思ひ切りましたと立派に言擧しなさい』

國依『そんなら……スッカリ思ひ切りました』

高姫『ヤレ〳〵嬉しや、お前は本當に見上げたものだ』

國依別「スッカリ思ひ切つたのは、皺苦茶婆アの高姫さんとの交際だ、アハヽヽ」

高姫「エヽ國さん覺ゑて居なさい。明日の晩にはアフンとさして上げますぞや。女の一心岩でもつきぬく、これが通らいでなるものか！」

と目をつり上げ乍ら、あはたゞしく此場を立去つた。

（大正一一、八、二四、舊七、二、松村眞澄錄）

第二四章　冷水（九一五）

高姫は國依別の室を立出で、應援を求めて此目的を達せんと、鷹依姫、龍國別の一室を訪問した。

高姫「御召なさいませ……鷹依姫さん、龍國別さん、何とマア親子仲のよいこと、あなたも孝行な息子を持つて幸福ですなア。私の樣な獨身者は親子睦まじう、そうして御座る所を拜見致しますと、實に羨ましうなつて來ました。本當に親子の圓滿なのは見よいものですワイ……時にお二人さんに至急御相談したい事があつて、參りました。どうぞ暫くの間御邪魔をさして下さいませ」

鷹依「それはマア能う來て下さいました。伴の龍國別が孝行にして呉れますので、私も

全く神樣のお蔭だと思ひ、朝な夕なに感謝を致して居ります。若い時には隨分極道で、何べんも親を泣かせたもので御座いますが、年の藥で此やうな孝行な息子になつてくれました。子が無うて泣く親は無いが、子がある爲に泣く親は、世界に澤山御座いますでなア。私は神樣のおかげで子がある爲に日々勇んで暮して居ります」

高姫「それは何より結構で御座います。併しお二人さん、一つ聞いて貰はねばならぬことが突發して來ました」

龍國「高姫さん、ソリヤ大方國依別さまのお目出たい話でせう。本當に結構ですなア。不斷から一寸變つた偉い男だと感服してゐましたが、ヤツパリ栴檀は二葉より馨し、蛇は寸にして人を呑むとやら、ヤツパリ身魂の性來は爭はれぬものですワイ。私は今迄心易い友だちとして、ワレかオレかでつき合つて來ましたが、モウ是からは態度を改めねばならなくなつて來ました。本當に人の出世は分らぬものですな……高姫さん、あなたは國依別さんの結婚について御祝をしたいから、さんな物を送つたらよかろうと云ふ同情ある御相談でせう……なアお母アさん！」

鷹依「何から何まで、耳から鼻迄、目から口までつきぬけるやうな高姫さまが御座るのだから、メツタに仰有る事に抜目はありませぬ。高姫さんの御意見に御任せしなさい」

龍國「ハイ」

高姫「コレ龍國別さん、お前さんのお母アさんの仰有つた通り、何事も私の意見に從うのだよ」

龍國「ハイ、從ひますよ。何を祝うたら宜しいでせうなア」

高姫「エ、辛氣臭い、お祝ひ所の騒ぎですか。國家の興亡危機一髪の間に在り、地異天變の大騒動、何を氣樂な悠然として、控へて御座るのだい。マア能う考へて御覧、女たらしの後家倒し家潰しの國依別の如うなカラクタ身魂と、鹹水晶の生粋の大和魂の末子姫様と夫婦にでもせうものなら、それこそ白米の中へ砂を混ぜたやうなものだ。どうにもかうにもマヽになりませぬぞや。何とかして此縁談を冷す工夫をせなくては、國家の一大事だから、御相談に來ましたのぢや」

龍國「冷す相談ですか？　此暑いのに、俄に方法もありませぬワ。何しろ百度以上に逆上せ上つてゐるのですからなア。併し冷さぬと腐敗の虞がありませう。あなた御苦勞だが、一つ龍紋氷室へ走つて行て、百貫目程氷を買つて來て下さいな」

高姫「コレ龍さん、氷の話ぢやありませぬぞや。お前さんは此暑さで、氷の事許り思つてゐるものだから、何を云つても皆氷に聞ゐるのだよ」

龍國「チツとカチワリにして、細かう云つて下さらぬと、氷解することが出來ませぬワイ」

高姫「コレ〳〵お前さん、私がこれ程熱心に話をしよるのに、頭から冷かすのかいなア」

龍國「高姫さん、冷さうと云つて來たぢやないか。そうだからお前さんの意見に從つて、冷やかしにかゝつて居るのだよ。冷笑冷罵の言靈を一つ進上致しませうか。今朝から井戸の中へ吊り下ろしておいたのだから……」

高姫「エ、譯の分らぬ男だなア。西瓜の事を誰が云つてますか！」

鷹依「コレ〳〵龍國別……勿体ない、高姫さんに向つて、そッぺコぺと口答をす

るものぢやありませぬぞね……なア高姫さま、若い者と云ふものは、實に側に聞いて居つても、氷の側に居るように、ヒヤ〳〵するやうな事計り申します。どうぞ冷靜にお聞き下さいませ」

龍國「高姫さん、お前さんは善言美詞の言靈を忘れましたか？　國依別さんが、モウ一息で成功すると云ふ間際になつて、昔のアラをさらけ出したり、反對運動をすると云ふ樣な非人道的な事が御座いますか、私は左樣な相談には眞平御免ですよ」

高姫「私だとて國依別のアラをさらけ出すのは實に辛い、熱鐵を呑むやうな心持がするけれど、多勢の人民と一人とには替へられませぬから、止むを得ずイヤな事を云はねばならぬ因果な身の上……コレ鷹依姫さん、高姫の心の中を推量して下さいませなア、オン〳〵」

鷹依「御尤もで御座います。併し乍ら神素盞嗚大神樣の御所望に依り、言依別神さま松若彦の神司のおきめ遊ばしたこと、我々がどうかう申す權利もなければ、場合でも御座いませぬ。どうなるのも皆神樣の御仕組で御座いませうから、吾々としては只目出たいと御祝ひ申すより外に道はなからうかと存じます」

高姫「エーエ、親子共、揃ひも揃うて分らぬ人だなア。是では何程變性男子の系統……オツトドツコイ、是は云うのぢやなかつた……高姫が、シヤチになつてきばつても、此濁流はせきとめる事は出來ないかなア……ア、惟神霊幸倍坐世、どうぞ神樣、早く善と惡とを立分け下さいまして、神素盞嗚大神樣の珍の御子の結構な身魂を、國依別の泥身魂が汚しませぬ樣に、夜の守り日の守りに守り幸はひ下さいませ。偏に御願申上げ奉ります」

龍國「高姫さん、今となつて、何程ジリ〳〵問ひをしたつて駄目ですよ、私も餘り國依別さんの惡口をきかされて、腹が龍國別となつて了つた。サア〳〵一時も早く此處を龍國別として下さい。コレから國依別さんの所へ御祝ひに行かねばなりませぬ……お母アさん、高姫さんに失禮して、親子揃うて、此お目出たい結婚の前祝に行つて來うぢやありませぬか」

高姫「どうなつと、御勝手になさりませ。後で後悔せぬ樣に一寸氣を付て置ますぞ!」

龍國「後で後悔所か、最早此結婚の話は前以て公開された筈だ。アハヽヽ」

斯かる所へカールは勢ひ能く走り來り

カール「今言依別樣の御居間へ招かれて行つて來ました所、タカとか鳶とかの雌鳥がやつて來て、畏れ多い大神樣の思召に依つて成立つた結構な〳〵結婚問題を冷やかさうとして百萬駄羅泡を吹いて歸つたと云ふことで御座いましたよ。何れ鷹依姫樣や龍國別樣のお宅へもタカがケチをつけに行くだらうからお前一つタカや鳶が出て來ても、相手にならず、ぽつ返せと仰有いましたからお使に出て參りました。グヅ〳〵してると、タカや鳶に油揚をさらはれ、アフンとしても後の祭りだから、一寸言依別樣の御命令に依つて御知らせに參りました……オツトドツコイ此處にタカとか高姫さんとか云ふ御本尊が御座つたのかなァ……大神樣何卒神直日大直日に見直し聞直し下さいませ。ア、惟神霊幸倍坐せ〳〵」

（大正一一、八、二四、舊七、二、松村眞澄錄）

皇神の恵みのそでに包まれて
我は高天の原に昇らむ
村肝の心汚き獣族の
猛り狂ひて御神苑あらしぬ
現し世にかくれて神國を守りたる
皇大神に我も習はむ

＝＝海洋萬里（未の巻）終＝＝

大正十二年十月十日　印刷
大正十二年十一月十日　發行

海洋萬里未の巻奥附

定價　金壹圓五拾錢

京都府何鹿郡綾部町字上池田二七番地
編輯者　櫻井重雄
京都府何鹿郡綾部町大字神宮寺一番地ノ一
發行兼印刷者　近藤貞二
京都府何鹿郡綾部町字本宮東四ツ辻十三番地
發行兼印刷所　天聲社
【振替大阪六〇五三四】

不許複製

▽豫告

海洋萬里（申の卷）十月廿五日發兌の豫定

海洋萬里【申の卷】目次

序歌……

瑞祥……

第一篇　誠心誠意

第一章　高論濁拙……

第二章　灰猫婆……

第三章　言靈停止……

第四章　樂茶苦……

第二篇　鶴亀躍動……

第五章　神壽言……
第六章　皮肉……
第七章　心の色……
第八章　春駒……
第九章　言靈結……
第一〇章　神歌……
第一一章　波靜……
第一二章　袂別……

第三篇　時節到來

第一三章　歸途……
第一四章　魂の洗濯……
第一五章　婆論議……
第一六章　暗夜の歌……
第一七章　感謝の涙……
第一八章　神風淸……

第四篇　理智と愛情

第一九章　報告祭……
第二〇章　昔語……
第二一章　峰の雲……
第二二章　高宮姫……
第二三章　鐵槌……
第二四章　春秋……
第二五章　琉の玉……
第二六章　若の浦……

海洋萬里(申の卷)目次　終

申込所　丹波綾部町　天聲社
振替口座大阪六〇五二〇番

王仁文庫（全十篇）

出口瑞月氏が神授の大經綸と天來の大抱負と、縱横の大神機と時に應じ機に臨みて、隨所に閃發せし文章詩歌其他二十有餘年間積んで山をなす。乃ちその中より、精粹を拔き、珠玉を選び、序を正し類を纂め、王仁文庫と題して茲に刊行の機運に向へるは誠に時代の急迫の然らしむる所にして、實に百萬讀者の渴望を滿する神液甘露たりと謂ふべし。

王仁文庫
第一篇

皇道我觀

定價　金五拾錢
郵税　金貳錢

「皇道我觀」は皇道の眞髓を縱說橫論し、世道人心の歸趨を指示せる大文字にして皇國の臣民たる者の必讀の名著たり。

王仁文庫
第二篇

國教論集

定價　金五拾錢
郵稅　金貳錢

本篇には「國教樹立論」「信仰の墮落」「皇國傳來の神法」「太古の神の因緣」の四篇を收む。皇道の眞髓は一貫して漲り溢れ、國教は腐敗し信仰の墮落して其極に達した る混沌の現今を救ふは本篇に依らざるべからず、太古の神々の因緣は必ず見落す勿れ。

王仁文庫
第三篇

瑞能神歌

定價　金五拾錢
郵稅　金貳錢

瑞の神歌は裏の神諭にして仁愛大神の人類に與へられたる神示なり、方舟なり、救世の網なり、すみやかに起りつゝあり亦速やかに起るべき大地獄道の火焰をまぬがれんとせば、本篇を見よ。叩かざれども開かれし救の門、求めざれ共仁慈の神は之れを與へられぬ。迷ふ勿れ!!來れ!

王仁文庫
第四篇

記紀眞解

定價　金五拾錢
郵稅　金貳錢

世に國學者を以て任ずる者徒に多しと雖も、眞の古事記を解する者一人として無し、日本書記を解する者亦あるなし、之れ其內義を理解する能力なき爲めなり、本篇は「古事記」の一節及び「日本書記」の一節を解釋し密義を發現されしものにして現代と併せ解釋され必ず何人も肯定する樣平易に解かれしもの也

王仁文庫
第五篇

道の大原

定價 金五拾錢
郵税 金貳錢

三丹の嶺峰を一眸に收め、保津の清流を双脚に踏みて、高倉山の山徑に宇宙の秘密と人生の幽旨とを問答せる顯幽の二大神人あり。一を本田親德大人の幽姿となし、一を出口瑞月氏の顯體となす。而して其神言秘語を集拾類纂せられしものは本書也。

王仁文庫
第六篇

多滿の礎

定價 金五拾錢
郵税 金貳錢

本書は教祖の表の神諭に對する出口瑞月氏の裏の神諭の一部分也。迷へる者、惱める者は本書によりて靈魂の糧を求めよ。

王仁文庫
第七篇

記紀眞釋

定價 金五拾錢
郵税 金貳錢

本書は古事記日本記の神代の卷を眞釋して現代の危機を救濟指導せんとするの大文字也。本邦千古の神文古典に含蓄せる豫言的價値を知らんと欲する者は、先づ一讀するこをを怠るべからず。

王仁文庫
第八篇

八面鋒

定價 金五拾錢
郵税 金貳錢

本書には「公認教と非公認教」以下都合八篇を收輯す。何れも出口瑞月氏が皇道と宗教の本義に就き縱説横論し、當局並びに世人の無智と偏見とを指摘し批判を加へて遺憾なからしめたり。